

ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書

目 次

I 平成 24 年度 F D 推進事業について	
・平成 24 年度 F D 推進事業について……………	3
II 特別公開授業, 特別公開授業に係る授業研究会・F D ワークショップ	
・平成 24 年度特別公開授業実施要項……………	7
・平成 24 年度特別公開授業に係る授業研究会・F D ワークショップ実施要項……………	8
○各コース実施報告書	
人間形成コース……………	10
幼年発達支援コース……………	12
現代教育課題総合コース……………	14
臨床心理士養成コース……………	16
特別支援教育専攻……………	18
言語系(国語)コース……………	22
言語系(英語)コース……………	24
社会系コース……………	27
自然系(数学)コース……………	29
自然系(理科)コース……………	31
芸術系(音楽)コース……………	34
芸術系(美術)コース……………	36
生活・健康系(保健体育)コース……………	41
生活・健康系(技術・工業・情報)コース……………	44
生活・健康系(家庭)コース……………	46
国際教育コース……………	49
III 平成24年度特別公開授業に係る全体会	
・平成 24 年度特別公開授業に係る全体会実施要項……………	55
IV 公開授業週間	
・平成 24 年度公開授業週間実施要項……………	81
V 平成 24 年度 F D 推進事業の成果と課題	
・平成 24 年度 F D 推進事業の成果と課題……………	85
おわりに……………	理事・副学長(教育・研究担当) 西園芳信…………… 86

I 平成24年度 F D 推進事業について

平成24年度FD推進事業について

(公開授業週間・特別公開授業・特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ・全体会)

○ 平成24年度FD推進事業の目的

鳴門教育大学は、教育実践学を中核とした学部・修士による6年間を見通した教員養成を目指すとともに、学校教育や教科教育の課題を解明できる実践的能力を育成することを中期目標の一つとして掲げています。この目標を達成するための方策として、FD（ファカルティ・ディベロップメント）推進事業を計画的に実施することを、中期計画の中に謳っています。

平成21年度からは、全学組織としてFD・SD委員会を設置し、FD事業をより一層推進することに努めてきましたが、今年度は委員会を見直し、FD専門部会をFD委員会に格上げすることにより、より効果的にFD推進事業を実施することとなりました。本事業は、本学教員の授業実践能力の向上と、授業に対する学生の認識の深化を図ることを目指すものであり、具体的には以下の3点を目的としています。

- ① 教員養成大学である本学における、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有する。
- ② 教員養成大学である本学における、FDの在り方を構築する。
- ③ 本学の学生の現状を踏まえた、授業改善のための課題を明確にする。

本年度も、FD推進事業に各教員がより一層参加できる環境を整えることを企図し、特別公開授業を各コースごとに設定しました。また、特別公開授業に係る授業研究会とFDワークショップについてもコース主体で期日を設定し、実施することとしています。

さらに、今年度は、コースを超えた共通課題に取り組むため、各部で選定した特別授業について報告後、全体討議を行う場を設けるため、全体会を実施することとしています。

FD推進事業については、全教員が協同して取り組むことが望まれています。各教員には、各FD推進事業に是非ご参加いただきますよう、お願いいたします。

○ 公開授業週間

【目的】 公開授業週間においては、教員相互の授業参観を通して授業改善に取り組む意識を高めるとともに、具体的な授業事例をもとにして各教員の授業改善を図ることを目的とする。

【期間】 平成24年10月17日(水)～平成24年10月23日(火)

(参観申込期日：平成24年10月12日(金))

○ 特別公開授業、特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ

【目的】 特別公開授業は、他教員の優れた授業実践を参観し、公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有することを目的とする。

FDワークショップは、教員養成におけるFDの特性と意義に関する認識を深め、本学におけるFDの在り方を構築することを目的とする。今年度のFDワークショップは特別公開授業

の授業研究会と連動し、具体的な授業を素材として教育実践力を培う授業のあり方を検討する。

【期 日】 平成 24 年 10 月 17 日(水)～平成 24 年 10 月 30 日(火)

【対象者】 本学教員全員

【会 場】 平成 24 年度特別公開授業実施要項, 平成 24 年度特別公開授業に係る授業研究会・FD ワークショップ実施要項 参照

○ 全体会

【目 的】 コース・専攻を単位として実施した特別公開授業の結果出された共通の課題について、コース・専攻を超えて、各部から発表していただきながら全体会として展開することで、授業改善等につなげることを目的とするものである。

【日 時】 平成 24 年 10 月 31 日(水) 14 時 40 分～16 時 10 分

【会 場】 B 101 講義室

Ⅱ 特別公開授業, 特別公開授業に係る授業 研究会・FDワークショップ

平成24年度特別公開授業実施要項

1 目的・意義

特別公開授業は、他教員の優れた授業実践を参観し、公開された授業に係る授業研究会を実施することを通して、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有することを目的とする。

今年度も、FD推進事業に各教員がより一層参加できる環境を整えることを企図し、特別公開授業を各コースごとに設定している。各教員の専門領域に関連する授業を参観し、授業研究会で討議することを通して、教育実践力を培う授業のあり方をそれぞれの授業と関連づけて考究することが期待できる。

2 対象者 本学全教員

3 期 日 平成24年10月17日(水)～平成24年10月30日(火)

4 特別公開授業 日程

コース	授業名	実施日の担当教員	授業日	曜日	時限	教室
人間形成	学校と人間形成	木内陽一	10月22日	月	3限	B 206
幼年発達支援	保育原論	湯地宏樹	10月25日	木	1限	A 512
現代教育課題総合	教育実践フィールド研究	谷村千絵, 小西正雄, 藤村裕一, 田村和之	10月17日	水	4限	A 214
臨床心理士養成	臨床心理学演習	中津郁子	10月18日	木	2限	B 205
特別支援教育	特別支援教育コーディネーター実践論	井上とも子	10月25日	木	4限	附属特別支援学校地域連携室
言語系(国語)	コミュニケーションと言語・教育	原 卓志	10月17日	水	2限	B 104
言語系(英語)	英語学概論	藪下克彦	10月25日	木	3限	B 104
社会系	経済学概論	青葉暢子	10月29日	月	5限	A 107
自然系(数学)	算数科教育論B	坂井武司	10月19日	金	3限	B 105
自然系(理科)	生物科学特論I	米澤義彦	10月25日	木	2限	C 403
芸術系(音楽)	初等音楽II	草下 實	10月29日	月	2限	D 401
芸術系(美術)	初等中等教科教育実践I	武市 勝	10月24日	水	1限	D 202
生活・健康系(保健体育)	運動方法実習VI(バスケットボール)	梅野圭史	10月29日	月	5限	体育館
生活・健康系(技術・工業・情報)	木材及び木質材料学	米延仁志	10月18日	木	4限	B 304
生活・健康系(家庭)	住居学概論	金 貞均	10月25日	木	4限	C 105
国際教育	国際教育総合セミナーII	小澤大成	10月22日	月	3限	B 208

※ 特別公開授業は全教員への公開とする。

5 特別公開授業に係る授業研究会について

- 特別公開授業については、授業終了後に授業研究会を実施する。授業研究会は、FDワークショップと同時開催とする。
- 授業研究会の日程、実施要領については、特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ実施要項を参照のこと。

平成 24 年度 特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ実施要項

1 目的・意義

FDワークショップは、教員養成におけるFDの特性と意義に関する認識を深め、本学におけるFDの在り方を構築することを目的とする。今年度のFDワークショップは特別公開授業の授業研究会と連動し、具体的な授業を素材として教育実践力を培う授業のあり方を検討する。

本ワークショップを通して、各教員が教育実践力を培う授業のあり方を共有し、教員養成大学である本学におけるFDについての理解を深めることが期待できる。

2 対象者 本学全教員

3 期 日 平成 24 年 10 月 17 日(水)～平成 24 年 10 月 30 日(火)

4 テーマ 『よい教師を育てる授業とは』

○教科教育と教科専門との関係

○授業実践力と専門知識・資質との連関性

5 特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ 日程

コース	司 会	実施日	曜日	時 限	教 室
人間形成	梶井 一暁	10月22日	月	4 限	B 203
幼年発達支援	浜崎 隆司	10月25日	木	3 限	A 512
現代教育課題総合	太田 直也	10月24日	水	2 限	A 218
臨床心理士養成	葛西真記子	10月18日	木	5 限	A 409
特別支援教育	田中 淳一	10月31日	水	2 限	A 519
言語系 (国語)	幾田 伸司	10月17日	水	5 限	A 407 国語ゼミナール室
言語系 (英語)	山森 直人	10月25日	木	5 限	A 318
社会系	井上 奈穂	10月29日	月	6 限	A 215
自然系 (数学)	平野 康之	10月19日	金	4 限	C 716 数学ゼミナール室
自然系 (理科)	武田 清	10月25日	木	3 限	C 403
芸術系 (音楽)	森 正	10月29日	月	3 限	芸術棟教員合同研究室
芸術系 (美術)	野崎 窮	10月24日	水	2 限	D 202
生活・健康系 (保健体育)	乾 信之	10月29日	月	18:00～	E 301 教員合同研究室
生活・健康系 (技術・工業・情報)	宮本 賢治	10月18日	木	5 限	B 304
生活・健康系 (家庭)	速水多佳子	10月26日	金	1 限	C 204
国際教育	石村 雅雄	10月22日	月	4 限	B 208

※ 特別公開授業に係る授業研究会、FDワークショップは、全教員への公開とする。

6 特別公開授業に係る授業研究会・FDワークショップ 実施要領

- 特別公開授業に係る授業研究会は、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方について、特別公開授業を素材として検討する。
- FDワークショップは特別公開授業に係る授業研究会と連動し、特別公開授業を素材として、上記のテーマについて検討する他、平成24年度は、特別公開授業に係る全体会の目的にもあるとおり、次の2つの課題についても議論する。
 - (ア) 学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、例えば、コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されていることについて
 - (イ) 教科教育と教科専門との関係、あるいは、授業実践力と専門的知識との関連性について

7 「特別公開授業・FDワークショップ実施報告書」について

- 特別公開授業・FDワークショップについては、各コースごとに報告書を提出する。
- 報告書には、以下の内容を記載する。
 - 標題：特別公開授業・FDワークショップ実施報告書（コース名）
 - 1 特別公開授業名
 - 2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数
 - 3 授業概要
 - 4 授業研究会要録
 - 5 FDワークショップ要録

* 要録については、討議の逐語録でも討議結果の概要でもよい。
- 報告書の分量はA4サイズ2ページ程度とするが、上限は設けない。
- 提出先：教務課教育支援チーム（gakubu@naruto-u.ac.jp）
- 提出期限：平成24年11月30日（金）

【人間形成コース】

1 特別公開授業名 学校と人間形成

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成24年10月22日(月)・第3時限・B205・木内陽一・21人・3人

3 授業概要

「学校と人間形成」は学部の教職専門にあたる科目である。2人の教員が担当し、それぞれ前半期と後半期をうけもつ。対象となった週の授業は前半期であり、全15週のうち2週目の授業である。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の『神々の国の首都』を資料として、松江での教師時代の彼のまなざしと表現を追い、①ヨーロッパと日本、②理性の時代といわれる18世紀と感性の時代といわれる19世紀、それぞれの交差を読み解くことが、授業では行われた。

4 授業研究会要録・FDワークショップ要録

① 授業の進行，方法

- ・ハーンの写真が提示され、イメージの喚起に効果的であった。
- ・受講者を指名して授業を進める方法は、緊張感をもたせ、また考えるきっかけをつくるのに、効果的であった。
- ・OHPを使っているが、今後はプロジェクターの利用も考えられる。
- ・ハーンの著作のドイツ語版の原本が用意され、興味深かった。

② 受講生の予習，復習

- ・先週配布した資料を忘れてくる受講生がおり、資料の再配布などのフォローの必要があるが、どの程度まで手厚くそれを行うのが、指導上、適切なのか。
- ・先週配布資料を事前に読んで授業に臨んだ学生は、確認した限り、一人もいない。資料に対する感想や解釈を尋ねても、その場で返される内容のほとんどは平板である。
- ・読めない漢字もある。
- ・次週使う資料を配付した。読んでくるか、期待したい。

③ 受講生の学習意欲

- ・知識欲を「挑発」できるか。
- ・質問に対する返答の、何かを拾い、発展させる工夫。
- ・同じ質問を別の受講生にもすることにより、同じテキストから違う読み取りをする存在のあることを知らせる。

5 コメント

「耳無芳一」や「雪女」の怪談話で知られるハーンの感性や、近代日本教育への目は、21世紀に生きるわれわれに何を気づかせるか。教師を目指す受講生に対し、教員としての教室での教授スキルにとどまらない、教育者としての価値や信念を再考させる契機が配された授業であったと思われる。これにどう受講生が「挑発」されるか、であるが、今後も怠らず努めるものである。

以上

【幼年発達支援コース】

1 特別公開授業名：保育原論

2 平成24年10月25日(木), B512教室,

担当教員：湯地宏樹教授 受講者数：7名 参観者数：3名

3 授業概要

今年度は、学校教育学部幼児教育専修の学生が5名、小学校教育専修英語科教育コース1名、大学院学校教育研究科人間教育専攻幼年発達支援コース長期履修学生1名の計7名が受講している。

「保育原論」は保育士資格必修科目である。その内容は厚生労働省告示に基づき、保育士養成課程等検討会の提示した科目内容に準じている。

1. 保育の意義について理解する。
2. 保育所保育指針における保育の基本について理解する。
3. 保育の内容と方法について理解する。
4. 保育の思想と歴史的変遷について理解する。
5. 保育の現状と課題について考察する

本授業は、これらを時間毎に消化することはせずに、歴史から現代の保育を知るという構造で授業を進めるように計画した。すなわち、倉橋惣三の保育論と『保育所保育指針』を比較しながら、真の保育とは何か？を追及することを目的としている。

授業方法としては、90分＝30分×3（①倉橋惣三『幼稚園真諦』の分析、②保育に関するビデオ及び討議、③保育実践事例ビデオ及び討議）ととらえ、飽きないように工夫している。ビデオは、そのまま用いると時間がかかるので編集したものである。

また、『幼稚園真諦』は事前に該当箇所を購読しておくこと、『保育所保育指針』との関連のまとめ、手遊びは担当を決めて発表するなど、予習・復習を促している。手遊びは当日まで、『保育所保育指針』のまとめは前日までに（前期 情報科目履修済みなので）パワーポイントで提出することになっている。

本時（10月25日公開授業）は、4回目にあたり、授業内容としては①『幼稚園真諦』では「生活へ教育を」の節、それに関連して『保育所保育指針』「環境を通して行う保育」、②ビデオ視聴は「フレーベル（下：晩年、幼稚園誕生）」、③事例ビデオは「なんで泣いているの？パート2」であった。テーマは、「環境」「理想の保育者像」である。



4 授業研究会及びFDワークショップの要録

授業参加者A：①，②，③はどのように関連付けているのか。

授業担当者：集中が途切れないように配慮したものである。また映像資料を入れることで分かりやすくしている。

授業参加者A：②については，映像資料であるのでわかりやすい。

授業参加者B：③について，事例2回の提示では理解が難しいのではないか。もう少し解説を加えて説明をするほうがいいのではないか。①②③を30分ずつに区切っていることで学生の集中力が途切れないのは評価できる。講義ノートを学生に書かせているがその目的は？

授業担当者：事例の場面では，もう少し丁寧な解説が必要であるかもしれない。講義ノートは保育実習時の日誌がかけられることを目指している。特に，保育者の意図がかけられるようになるように，本授業に取り入れている。

授業参加者C：③について保育実践力と専門的知識との関連付けが意図されていて，その内容も学生が講義の予習，復習をちゃんとやってくるように工夫されているところは，自分の授業にも取り入れてみたいと思った。

授業担当者：手遊びは音楽を用いても可としているが，担当学生は実際の保育場面を想定してよく練習していた。『幼稚園真諦』と『保育所保育指針』との関連は，両方とも読み込んでいないと該当箇所を見つけられないが，担当学生はそれを的確に見つけて，見やすいスライドを作成していた。授業者の反省としては，①，②，③がほんとうは流れるようにしたかったが，ブツ切りになってしまった点である。実践事例でもいい意見を出してもらったのもっと広げられたと思うが，時間が足りなかったので次回に補足しようと考えている。

総じて，本講義の授業内容は保育の理論について直接扱ったものであり，保育者が身につけなければならない保育理論に関わる極めて重要な知識を得る機会となっていることから，保育理論に加えて教育実践力を養うという点で優れた講義のあり方を示すものであり，参観者にとっても大いに参考になる授業であった。



文責・浜崎隆司（幼年発達支援コース）

【現代教育課題総合コース】

1 特別公開授業名：教育実践フィールド研究

2 授業日(曜日)：平成24年10月17日(水)

教室：A 214

担当教員名：谷村千絵, 小西正雄, 藤村裕一, 田村和之

受講者数：12名

参観者数：3名

3 授業概要：

1) 受講生は3つのグループに分かれ、それぞれが独自のテーマを設け調べ学習をした成果を発表した。また、各グループがそのテーマにそって近隣の小学校と連携して進めている防災対策・教育について報告。その後、質疑応答が行われた。

① グループ1 防災伝承を生かした防災教育について

- ・地域に適した防災教育につながる。
- ・災害時に大人の指示が無くとも適切な行動をとることができる子どもの育成につながる

② グループ2 『学校防災管理マニュアル(暫定版)』と『地域とつなぐ防災教育』

- ・他県のものと比較すると徳島県版は分かり易い(例えばフローチャートの使用が多い)。
- ・3つの知の重要性(「人を知る」「地域を知る」「災害を知る」)

③ グループ3 『<生活防災>のすすめ』と『クロスロード・ゲーム』

- ・従来の最適化防災から生活防災への転換の必要性。
- ・問題の共有と合意形成の必要性。

2) 今後の取り組み(予定)について

① それぞれのグループが連携校で授業を行う。

グループ1：黒崎小学校 1年生

グループ2：北灘東小学校 6年生

グループ3：堀江南小学校 全学年

② 鳴門教育大学における防災訓練への参加 小レポート課題。

4 授業研究会要録

1) 授業担当者による授業のねらいの確認

- ・各グループの調べ学習の成果を発表し、情報を共有する。
- ・小学校での授業実践に向けて、進捗状況を報告し、アイデアを出し合う。

本時の具体的なねらいは、上記のとおりであるが、「教育実践フィールド研究」の授業の性格から

して、学生一人一人が現場のニーズを把握し、学校と調整しながら授業内容や方法を考え、グループで協働して一つの授業を作り上げることが、大きな授業全体のねらいである。これらについて、本時の導入・まとめにおいて、学生の意識を喚起するようにした。

2) 参観者の所感

- ・保護者も参加する取り組みは非常に有意義であると思う。
- ・「防災ゲーム」を行うに際しては、ゲームを行うことの意義や手順を明らかにしておく必要がある。
- ・地域とのかかわりを重視するのは良いが、個人情報への扱いには注意せねばならない。
- ・防災教育の一層の必要性が叫ばれている今日、この授業における取り組みの持つ意味は大きい。
- ・徳島県のみならず他県の状況までも詳細に調べていることには驚いた。
- ・災害の映像や画像を扱うときは受講者（特に子ども達）が精神的なショックを受けないように注意する必要がある。

5 FDワークショップ要録

引き続き「よい教師を育てる授業」について討議がなされた。参加者全員の意見はほぼ一致したものであり、次の2点に集約される。

- 1) そもそも何をもって「良い教師」とするのが問題である。「良い教師とは何か」という問いは曖昧さにおいては「愛とは何か」「人とは何か」という問いと大差ないように思えるが、少なくともある特定の教科に関する知識の伝授に秀でた人間ではないであろう。極めて曖昧ながら、敢えて言うならば、教え育てるということを念頭に置けば、「良い教師」に求められる資質は、豊かな人間性ということになるであろう。
- 2) 「良い教師」とは専門知識を通じて人間の心に繋がるものを獲得した者でなくてはならない。例えば災害時の教師のとるべき行動に示されているように、「実践力」は教師が自らの専門知識を獲得してゆく過程で磨き上げた人間としての生き方から生じるものである。

以上

【臨床心理士養成コース】

1. 特別公開授業名

臨床心理学演習（感受性訓練）

2. 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

平成24年10月18日(木)・B 205・中津郁子・9名・6名

3. 授業概要

この授業は、臨床心理学の基礎的理論を学んだ者に対して、その実践方法の基礎を学ぶことを目的としている。コース内で学生の選択により、ロールプレイや箱庭体験など5つのグループに分かれて行っており、この授業グループは感受性訓練として行っている。

受講者は、大学構内を散策して、ここに留まった風景や事物を数枚、デジカメで事前に撮影して来る。それを授業の中で順番に映し、その写真を見て湧いてくる自分の気持ちや思いを言葉にしたり、映してきた人がどんな思いを感じていたのかに思いをはせたりする。それをグループ内で話し合うことにより、自分や相手の理解を深め、感受性を高めることを目的にしている。

本授業では、まず最初の人が、撮ってきた写真の中から『水滴ののっているクローバーの写真』を映した。その写真を味わいながらそれぞれの思いを自由に出し合った。「みずみずしい」「気持ちがいい」「食欲に水を吸ってやろうとしている」「自然のもので落ち着く」「寂しいけれど愛にあふれている」などの思いが出されたり、「小人になって下まで降りていくとその下には世界が広がっていて・・・」というような想像の世界を広げていったりした。その後、写真を撮ってきた人の思いを聞いたり、受講者の言葉を聞いて感じたことなどを話してもらったりした。

その次の人は、撮ってきた写真の中から、『壁』の写真を映した。「壊れてきそうで不安だ」「煉瓦で堰き止めている」「圧迫感がある」「無機質」「壊れると爽快感がある」などの湧いてきた思いや気持ちが出された。その後、写真を撮ってきた人の思いを聞いたり、受講生の言葉を聞いて感じたことや感想などを話してもらったりした。

また、両者共に、たくさん撮ってきた中から、何故この1枚を取り出したかについても話してもらい、その写真を撮った自分についての理解を深めてもらった。

授業の中では、それぞれに感じたことや思ったことを大切にするため、敢えて教員が、解説をしたりまとめたりすることはしないことにしていた。

写真を撮ってきた人への敬意を表して、拍手をして終わりにした。

4. 授業研究会（討議結果の概要）

- ・臨床心理学演習の授業は、5つのグループに分かれて授業を行っているため、各教員が互いにどんな授業を行っているのかわからなかったが、知る機会になった。また、それぞれに何かにまとめておくと共有できる。
- ・この授業は、エンカウンター的な要素も含まれていた。教員がファシリテーター的にいることで学生

は、どんな発言をしても受け入れられるという守られた空間で自由に気持ちや思いを出すことが出来ていた。

- ・本日の授業では、自由に学生の思いや気持ちを出させていたが、時には一つの発言を深めていくことも必要である。
- ・ここで感じることを大切にしているため、解釈的に言語化をしないようにしているが、感じるセッションと意味を理解するセッションを分けたほうがいいのではないか。教員が意味を解釈するのではなく、振り返りの時間を設けて、最後に書き留めるということをしてもいいのではという意見も出された。

5. FDワークショップ要録（討議結果の概要）

- ・この授業は専門の授業であるため学生は意欲的に取り組んでいる。
- ・この授業が、相談室でのケースを担当するにあたってどのようにつながっていくのかが学生にわかるようにしていけるような方法を考える必要がある。
- ・教員から学生に知識や技術を与えるというだけでなく、じっくりと感じたり味わったりという時間の中で、考えや思いを深めていくことも必要である。守られた空間の中で、自己や他者への気づきを深めていくという体験は臨床心理学の本質を踏まえた授業実践である。自己理解、他者理解を深めてこそ臨床心理の実践力や教育実践力を培うことにつながる。



【特別支援教育専攻】

1 特別公開授業名：「特別支援教育コーディネーター実践論」

2 授業日・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

授 業 日：平成 24 年 10 月 25 日(木) 第 4 時限

教 室：附属特別支援学校地域連携棟（プレールーム・観察室）

担当教員名：井上とも子（特別公開授業担当教員）

田中 淳一（授業研究会・FD ワークショップ，司会）

島田 恭仁・吉見 貴子（授業研究会・FD ワークショップ，記録）

受 講 者 数：4 名

参 観 者 数：7 名

3 授業概要

特別支援教育専攻（コーディネータ養成分野）の院生の教育実践力の向上を目指して、発達障害児の指導実践に関する実習的な授業を展開している。

毎週木曜 4 限を指導実践のセッション実施日とし、プレールーム内では、受講生が就学前の発達障害児数名に対するチームティーチングを行い、観察室においては、授業担当教員が保護者と共に児童の様子を見て、各々の児童の当面の課題についての説明とカウンセリング的な支援を行う。

受講生に対しては、授業担当教員がセッションの事前事後指導を学内で実施し、毎回の記録をもとに、各児童の課題と支援方法を検討すると共に、チームとしての振り返りを促して、受講生の教育実践力を高めるための指導を行う。

チームティーチングの当面の目的は、発達障害児の特性自体を改善することではなく、小学校への就学をスムーズに行えるように、就学前に適応的な学習・生活態度を身につけるように支援することである。具体的には、各々の児童に適した環境的・人的・個人的支援を提供することを主要な観点にして、各種の課題と活動の中で必要な支援を提供する。特別公開授業の当日（10 / 25：木 4 限）の学習指導案は次の通りである。

入学準備教室 学習指導案 2012 年度 10 月 25 日(木)		
日課	学習活動	活動のねらい
13:50～ 14:00 入室・準備・着替え	<ol style="list-style-type: none"> 1. 靴用ラックに靴を入れる。手順書をとる。 2. 席を確認する。 3. 着替えをする。(時間内に着替える。) 4. かばんをかける 5. 手順書を返す。 6. 名札をつける。 7. 係カードをとる。 8. いすに座る。 	ルール理解・遵守 状況理解 会話

14:00～ 14:10 始めの会	<ol style="list-style-type: none"> 1. 始まりの挨拶をする。 「起立」「これからわくわく教室を始めます」「礼」「着席」 2. 日付を確認する。 3. 係の仕事を決める。 4. 出席をとる。 5. 今日の予定を聞く。 6. 今日のためあてを確かめる。「なかよく活動しよう」 7. 終わりの挨拶をする。 8. いすをかたづける。 	状況理解 聞き取り 会話 質問
14:10～ 14:20 線つなぎ	<ol style="list-style-type: none"> 1. プリントを選ぶ。 2. 日付と曜日、天気の色を貼る。 3. 仲間を見つけて線をつなぐ。 4. ファイルにとじる。 5. えんぴつをふで箱にかたづける。 6. おてつだいがんばりカードをファイルに入れる。 	役割遂行 状況理解 聞き取り
14:20～ 14:35 絵本クイズ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 絵本の文を読む。 2. 絵本の文を聞いて、対応する絵を選ぶ。 3. 選ばれた絵が合っていたか判断する。 	聞き取り 状況理解 他者認知
14:35～ 14:45 まねっこ体操	<ol style="list-style-type: none"> 1. 指定された位置に並ぶ。 2. 手本のまねをして取り組む。 	ルール理解・遵守 他者認知 状況理解 身体感覚
14:45～ 15:00 カードゲーム	<ol style="list-style-type: none"> 1. おやつ用机・椅子を並べる。 2. やり方を確認する。 3. リズムよくカードを渡す。 4. 勝敗を受け入れる。 5. かたづけをする。 	ルール理解・遵守 他者認知 状況理解 会話 聞き取り
15:00～ 15:05 トイレ	<ol style="list-style-type: none"> 1. トイレ休憩について確認する。(ハンカチの確認、一列に並ぶ。) 2. 全員でトイレに移動する。 	身体感覚 他者認知 ルール理解・遵守 状況理解
15:05～ 15:20 おやつ・ かたづけ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 手順を確認する。2人組をつくる。 2. ジュースを選ぶ。 (1) 隣の友だちのジュースを聞いてジュースの写真を選んでもっていく。 (2) 友だちのジュースをついで運ぶ。 3. 係は「いただきます」の挨拶をする。 4. ジュースを飲む。 5. 紙コップを片付け、自分で机の上を拭く。 6. ふきんをバケツで洗い、干す。 7. お手伝いをする。 	聞き取り 会話 役割遂行 自己認知 他者認知 身体感覚
15:20～ 15:30 終わりの会 着替え	<ol style="list-style-type: none"> 1. 挨拶をする。(「姿勢」「これから終わりの会を始めます」「礼」) 2. 係の仕事やめあてが守れたか反省をする。 3. 帰りの挨拶をする。(「起立」「これでわくわく教室を終わります。帰りの挨拶をしましょう」(全員で)「先生、さようなら。みなさん、さようなら」) 4. 名札をはずし、着替えをする。(時間内に着替える。) 5. イスを入れる。持ち物を持つ。 6. 挨拶をして帰る。 	状況理解 聞き取り 自己認知 他者認知

4 授業研究会要録

参観者は観察室に入って児童支援と保護者支援の双方の様子を参観した。授業研究会（10 / 31：水2限）においては、司会者による進行のもとで、特別公開授業の内容に関して参観者より次のような意見・感想が出された。

- 1) ティームティーチングにおける役割分担が明確で、授業の構成が行き届いていると感じた。専門性のある教員がスーパーバイザーになって周到な指導を行ったことで、院生は児童への対応の仕方だけでなく、保護者との関わり方についても学ぶことができていた。院生の教育実践力の向上に大いに寄与する授業だと思われた。
- 2) 各々の児童の苦手な所を支援するために、環境設定・視覚的補助・即時強化などの様々な方略が取り入れられ、場面設定が行き届いていると感じた。院生にとっては教育実践力を高める機会となり、アドバイスを受ける保護者にとってもメリットの多い授業だったと思う。
- 3) セッション当日の労力もさることながら、事前の準備に膨大な時間をかけていると思った。受講生は観察室での保護者支援の様子を見ることもでき、家族支援の在り方を体得することに役立ち、観察室での学びは非常に大きいと感じた。保護者の悲嘆を知る機会もあり、受講生の熱意を引き出すことに役立つ授業だと思った。
- 4) 児童が「楽しかった!」と言って帰って行く様子が印象的だった。受講生の指導だけでなく、参加児童のスカウトとエントリー、セッションを行う場所の確保、おやつとジュースの手配など、マクロな意味での場面設定と準備を担当教員が行っているからこそできる実践だと感じた。
- 5) 個々の児童の集団の中での姿を見ることができてよかった。授業担当者が保護者と参観者に各々の児童の動きの意味を解説してくれたため、状況がよく理解できた。保護者にとっても、児童の様子の変化や今後の課題がよく分かり、児童理解を深めるよい機会になったと思う。
- 6) セッションにおいては児童への対応のしかたを体得でき、観察室においては保護者への対応のしかたを体得できるため、有益な授業だと思った。心理学的な様々な技法の習得だけでなく、児童の状態に合わせて臨機応変に対応する教育実践力を身につける上でも、効果的な授業だと感じた。

以上のような意見・感想及び種々の質問事項に対して、その都度、授業担当教員から詳細なコメントと回答が与えられた。最後に司会者から今後の展望について問われ、児童の行動調整を促すためにVTR記録に基づく振り返りを一層重視すること、引き継ぎをスムーズに行うために安定した受講生数を確保すること、対象児童の幅を広げるために学齢児の通級システムを検討すること等について意見交換を行った。

5 FDワークショップ要録

FDワークショップの目的の一つである「学生の授業に対する意欲・モチベーションをいかに向上させるか?」というテーマに関して、次の点が明らかになった。①専門性をもつ教員のスーパーバイズのもとで、授業に臨む前に事前の準備を周到に行うこと、②児童に対する支援の技法を実地に体得すること、③保護者への対応のしかたについても実地に体得すること、等が受講生の熱意を引き出す上で効果的であることが分かった。

また、FDワークショップのもう一つの目的である「専門的知識を授業実践力にいかに結びつけるか?」というテーマに関しては、次の点が明らかになった。①ティームティーチング、環境設定、視覚

的補助, 即時強化などの様々な技法についての専門的知識をもつこと, ② VTR 記録の視聴によるフィードバックを通じて, より良い対応のしかたを考慮すること, ③習得した知識・技能を児童支援の場で実際に使ってみること, 等が授業実践力の向上に役立つことが分かった。

まとめ

司会者による進行のもとで, 終始和やかな雰囲気の中に討論を終えることができた。参加者個々人が, 自身の授業内容と方法について振り返る好機となり, 今後の授業の進め方についてのヒントを多く得ることができた。

【言語系コース（国語）】

1. 特別公開授業

授業名・担当教員：コミュニケーションと言語・教育（原 卓志）

授業日時・教室：平成24年10月17日(水) 第2時限 B 104 教室

受講者・参観者数：受講者85名（当日はうち4名欠席），参観者5名

2. 授業の概要

[授業の目的]

本授業では、コミュニケーションの基礎となる言語について考察することを通して、コミュニケーション能力育成のための手がかりを得る。また、言語教育・外国語教育におけるコミュニケーション（能力）や、教室における談話、チャット・BBS などにおけるコミュニケーションの問題点についても考究する。

[授業の到達目標]

- ① コミュニケーションに関する基礎知識を獲得する。
- ② 言語コミュニケーションについて、体験を踏まえた反省的な知識を得る。

[本時の内容]

コミュニケーションが成立する条件を考える

- ・授業実践力の基礎として、自らのコミュニケーションを分析的に見る目を育てる。
 - (1) 大好きな相手に愛の告白をすることで、相手との出会いから告白までを語る。
 - (2) 告白体験（計画）を話し合い、コミュニケーションの成立に必要な要素を話し合う。

3. 授業研究会要録

[日時・会場] 平成24年10月17日(水) 第5時限 A 407（国語ゼミナール室）

[参加者数] 教員7名

まず、授業者より、以下の点について補足説明がなされた。

- (1) 学生が考えるコミュニケーション成立の条件は、適切な場を準備する、相手にわかってもらえるようにするなどといった漠然としたものにとどまっている。本授業では、そうした学生の認識に揺さぶりをかけたいと考えていた。
- (2) 本時では、「告白」を成功させるための努力を考えることで、相手理解や相手との人間関係の構築がコミュニケーションの成否に影響することをとらえさせようとした。
- (3) 本時の反省として、具体的な「告白のことば」の事例が出なかったため想定したようなコミュニケーションの必要条件が出にくかった点が挙げられる。

これらの補足を受け、以下のような質疑応答が行われた。

Q 1 最初から告白の言葉を考えた方がコミュニケーションの成否を考えられたのでは。

A 1 具体的な体験→理論的説明という形にしたかった。最初から告白の言葉を考えさせれば、成功を

狙ったリアリティのない言葉になりがち。それを避けたかった。

Q2 成功だけでなく、うまくいかなかった（ふられた）事例を考えてもよかったのでは。

A2 成否は結果なので、実際にはどちらでもよかった。告白に至るまでの過程を考えることで、コミュニケーションを成功させるための要素を考えさせようとした。

Q3 現職の院生とストレートの院生で反応に違いはあるか。

A3 立場ではなく学生によってちがう。授業としては、様々な立場や考えの人同士で話し合うことで、コミュニケーションの実際を体験させたいという裏目標もある。

4. FD ワークショップ要録 ※ 日時・会場・参加者数は授業研究会に同じ。

ワークショップでは、授業研究会をふまえ、授業実践力と専門知識・資質との連関について討議した。特に、学生を活動させる課題のあり方について議論を行った。

「告白を成功させるためにどうするかを、自身の経験を踏まえて考える」という今回の課題は、(1)人数が多く、受講生が興味を持ちやすい題材を課題とする必要があること、(2)学生は知識や興味が多様なので、わかりやすい題材を設定する必要があること、という条件を踏まえての課題設定になっている。また、この課題は、経験のない者（語りたくない者も含めて）は自分が理想とする告白を考えてもよいというニュアンスも含んでいる。

この課題について、恋愛体験はあまりにも生々しすぎて他者に話しにくい、個々の状況の違いが大きいので共通の要素を見つけにくい、という異論が出された。これをふまえ、本時の課題について賛否それぞれの立場から次のような意見が交換された。

[賛成] ・成功させなければならない切迫したコミュニケーションで、かつ受講生にある程度経験や心当たりがある場面として、告白という場面は適性が高い。

・コミュニケーションの成立条件だけを見ると都合主義や絵空事になってしまい、現実のコミュニケーションの難しさを考えることにつながらない。

・授業の進行を見ている限り、学生もおもしろがって取り組んでいた。

[反対] ・関係ができていない相手にリアルな生活を吐露させると、トラウマを呼び起こしかねない。作り話などの虚構の方が、安全装置が働く。

・同じシチュエーションで考えたり、成功例と失敗例を比較したりする方が、分析はしやすい。

・小説の設定を用いるなど、虚構を活用するという方法も考えられる。

本時では、授業者の意図と学生の状況を考え合わせた結果として告白場面が選択されている。学生の活動の実際と照らして、適切な課題だったと言える。

自分の経験を対象として分析する経験を持たせるのか、条件を統制して分析しやすくするのか、目的によって課題の設定は異なってくる。本ワークショップでは、このような学習課題の設定の仕方についての意見交換ができたことが、成果として挙げられる。

【言語系コース（英語）】

1. 特別公開授業名：「英語学概論」

2. 授業日(曜日)：平成24年10月25日(木) 第3時限 教室B 104

担当教員名：藪下 克彦

受講者数：41

参観者数：5

3. 授業研究会・FDワークショップ

参加者数：5（司会：山森 直人，記録：眞野 美穂）

4. 授業概要

音 (phone), 音素 (phoneme), 異音 (allophone), 音節 (syllable) などの音声学・音韻論的概念を理解させることを目的とするが、それらの概念をいきなり「教科書的」に解説し理解させるのではなく、前もって「調べ学習」では解くことのできない課題に取り組みさせる。その上で、上記の概念が課題の手がかりになることを示すことにより、大げさに言えば、学問の意義・方法論・実践を実感させる。さらには、授業で扱った内容の英語科教育との関連性にも目を向けさせる。

5. 授業研究会およびFDワークショップ要録

＜授業についての説明：藪下＞

- ・英語学概論は英語学の紹介を一通り行う授業である。
- ・教科書をなぞっていくような授業ではなく、普段考えていそうな具体的な問題から考えてもらうことで問題意識を持たせた上で、英語学、言語学の概念を実践的に学ぶことを目指した。

＜感想・意見・質問＞

- ・受講生に毎回発表をさせているのか？発表のないときはどのような授業をしているのか？
→（藪下）発表形式は今回がはじめてである。普段は問題をその場で考えさせるスタイルで授業を行っている。
- ・受講生が発表で扱った問題が授業内容に絡んできているのがよかった。
- ・フォニックスについては、触れられなかったが…
→（藪下）フォニックスは現職の受講生にとって特に関係あるので、話題として取りあげた。フォニックス導入の問題点を他の受講生には今後考えさせたい。
- ・藪下先生らしさの出た授業だった。
- ・パワーポイントはいつも使っているのか？
→（藪下）普段は使っていないが、板書の時間を省くために使用した。
- ・パワーポイントにはどこまで書くべきか？私は配付資料に授業内容をすべて書きこんで、受講生に配っているが、学生が安心しきってしまうためか、授業に集中しない状況もある。しかし、今回の

授業ではパワーポイントで提示した内容を資料として配付しなかったが、受講生はノート・メモをしっかりとっていた。資料を配らないことも一つの方法だと気づいた。すべて分かりやすく効率よく教えるためにどうすべきかと考えてしまうが、それだけではないことに気づかされた。今後の授業に生かしたい。

- ・フォニックスと本授業との関連性は直接的には語ってはなかったが、音素や音節とフォニックスとの関連性を受講生に気づかせる機会を与えられたのではないか？受講生の自立的思考を促すためにも学生側が読みとる部分かもしれない。
- ・小学校専修の学生が（選択科目という位置づけのため）英語音声学を履修しない状況があるが、小学校の外国語活動でこそ、将来の指導者としては（それを児童に教えることはなくても）音声学の知識は必要である。
- ・藪下先生の授業の談話構造は学生への問いかけの連続であり、問いかけることを中心に対話形式で授業が進められていた。自分ができない（一方的に話し続けてしまう）ので、もっと対話的に授業を進めたい。
 - （藪下）授業者としては問いかけてつなぐという意図だった。
- ・発表グループ以外の受講生は今回の課題（宿題）に対してどうしたのか？
 - （藪下）他の受講生は課題についてあまり考えていないのかもしれない。課題について自主的に調べるよう今後促していく必要がある。
- ・かなり進むスピードが速かった。
 - （藪下）どの程度理解できているかは不安だが、授業で扱う内容を課題として事前に学生に与えていることで、そのスピードが保てるのかもしれない。
- ・本授業は二つの意味（interesting で amusing）で面白かった。
- ・進度がはやかったためついていけなかった学生もいるかもしれないが、理解すべき点を焦点化していた点はとてもよかった。
- ・授業内容が盛りだくさんだったので、発表は1回の授業で1つの話題でもよいかもしれない。そうすれば、発表内容に関して学生にフィードバックする時間がもう少しできる。
- ・フィードバックとしてほめることも大切である。
- ・後ろの方の学生も含めて、対話型の授業をもっとやってもよい。
 - （藪下）まだ始まったばかりであり受講生全員の名前が覚えられていないことも理由のひとつである。
- ・パワーポイントは自分の考えも整理できるし、学生にも見やすいという利点がある。一旦作ると修正は簡単にできる。
- ・教科書はどのように使っているのか？
 - （藪下）教科書を読んできていることを前提に授業を進めている。授業で扱ったことと教科書の内容がどのように関連しているかを考えてもらうことにしている。時間がなかったが、さらに further reading や他の授業との関連を紹介する予定である。
- ・rhyme が何なのかまで説明できたらもっとよかったのでは？
 - （藪下）今日の目的は母音と子音の音節構造を考えさせることだった。
- ・適度に知的で、適度に砕けていて、学生は興味を持つだろう。

<授業者の反省点：藪下>

- ・準備に時間がかかるため、今日やったような授業を毎回はしていない。
- ・経験とその場の対応をふまえ、一学期を通した教材を作らなければならない。

6. まとめ

英語コースには英語学、英米文学、英語教育学の3分野があるが、学習内容としての3分野の関連性—例えば、音素や音節に関する英語学の知識が、英語教授法としてのフォニックスの限界を補うこと(英語教育学との関連)、あるいは、シェイクスピア作品における脚韻法の理解を促すこと(英米文学との関連)—を学生に気づかせることの意義を考える機会となった。また、将来教師として英語を教えるには、単に単語や文型・文法に関する知識だけではなく、その知識を深く解釈・鑑賞できる教養が求められることを再確認した。そのためには、我々が学生に教科専門の基礎・基本を教授していくことが重要なことを言うまでもないが、教科専門に対する興味・関心から自主的かつ知的に物事を追究する姿勢を養っていくことも大切であり、それがどのように実現できるかを今後考えていくことが求められる。

【社会系コース】

文責 井上奈穂（社会系コース 講師）

1. 特別公開授業名：経済学概論

2. 授業日

- (1) 授 業 日：平成 24 年 10 月 29 日(月) 第 5 時限
- (2) 教 室：A 107
- (3) 担当教員：青葉暢子
- (4) 受講者数：20 名弱
- (5) 参 加 者：立岡裕士・麻生多聞・町田 哲・原田昌博・伊藤直之・井上奈穂（以上 6 名）

3. 授業概要

：社会におけるお金の循環に関するマクロな理解を目的とした授業。

○導入：三面等価の法則についての復習

- ・「国民総生産」「国民総支出」「国民所得」などの重要語句の確認
- ・モデル図を用いた「お金」の循環についての確認

○展開：事例・演習を通して理解を深める

- (1) 需要の波及効果（ある人の支出は、他の人の所得を増大させる／需要が新たなる需要を生み出す）について理解する

→所得循環のモデル図を示し（ワークシート）、お金の循環をイメージさせる。

→事例（ある衣料品店の場合）を通じた演習の実施

- (2) 「需要と供給が等しくなるためにはどうしたらよいのか？」を考えさせる

→需要・供給の関係図の提示し、現実の場面での問題点（売れ残りや品不足が発生し、モデル図通りにいかないこと）を確認

○終結：展開部の内容を踏まえ、政府の介入の必要性を示唆する演習

→ $C = a + by$ と $C = y$ の接点を具体的数値を基に考察する。

（ C = 民間投資支出， b = 限界消費傾向， y = 可処分所得）

*終結部は、各自演習を実施。机間巡視を行い、学生各自の進度に応じた助言を行った。

4. 研究会要録及びFDワークショップ要録

- (1) 実施日：平成 24 年 10 月 29 日(月) 第 6 時限
- (2) 教 室：A 215
- (3) 参加者：立岡裕士・梅津正美・青葉暢子・麻生多聞・町田 哲・原田昌博・伊藤直之・井上奈穂
(以上 8 名)

(4) 質疑の実際

○授業者の説明

「三面等価の法則」を中心に、社会におけるお金の循環に関するマクロな理解を目的とした授業を行った。演習等を取り入れ、わかっていない子に対してもフォローできる体制を作っている。

○質疑

(1) 学生のレディネスについて

○どのような学生が本授業を受講しているのか？今回の授業では、数式が頻繁に使われており、数学についての知識が不十分な学生には難しい内容ではないのか？

→学生は選択必修として参加している。自分で選んでいる分、経済学に興味のある学生が多い。しかしながら、数学についての理解が不十分な学生が多いため、学生の分かる範囲で説明をするように心がけている。ただ、他大学と比べ、数学（算数）についての知識をフォローする場面が少ないように思う。

(2) 授業内容の体系化の必要性について

○授業内容の全体像が見えるように意識することは可能か？

→経済学全体を見せるのは難しい。本授業は「経済学概論」であるため、入口を見せるよう心がけている。

→授業の最初ではなく、最後のテストを通して、学生自身の振り返りを促している。

(3) 他の社会系コースにおける授業との関連について

○今回の授業では、具体例、モデルケースを挙げながら、社会に見られる原理・原則が教授されていた。そのアプローチは、歴史学と逆であるように思われる。歴史学では、具体例を挙げてその特徴を示す。今回の授業で、取り上げていたニューディール政策も歴史学の授業で取り上げている内容であり、経済学的なアプローチと歴史学的なアプローチを学生がつなげることができればよいと思う。

(4) その他

○ワークシートとその穴埋めが行われており、工夫が見られる。ただ、穴埋めにとどめず、構造化の視点を入れることによりもっとよいものになる。

○問いを交えて説明されており、共感が持てる。また、答えない（られない）学生に対するフォローもなされていた。

5. まとめ

今回のFDでは、様々な点が議論の俎上に上がったが、中心となったのは、以下の2点である。まず、受講している学生のレディネスの保障についてである。経済学の理解を深めるためには、基礎的な数学を理解していることが前提となる。しかし、最近の学生は、高等学校終了段階における数学の理解度に差があることを感じる。この差をどのように縮め、学生の理解を深めていくか課題と言える。これは、今回取り上げた経済学の授業だけでなく、歴史学、地理学など他分野においても共通の課題といえる。

2つめは、社会系コース内における各分野のアプローチの違いが浮き彫りになった点である。このアプローチの違いを学生に意識させることによって、他の授業においてもより豊かな学力保障が展開するのではないかという展望が示された。

【自然系コース（数学）】

1. 算数科教育論B

2. 平成24年10月19日(金)・B105・坂井武司・受講者数107名・参観者数6名

3. 授業概要

「数と計算」領域の指導の背景と内容①～整数と計算～

【購入することが必要なテキスト】「小学校学習指導要領解説 算数編」(文部科学省, 東洋館出版), 「算数科教育の理論と実際」(数学教育学会編, 聖文新社)

§ 1. 整数と計算の指導の背景

1. 加法の意味について解説し, 加法が現れる合併と増加という操作を行う場面について図をもとに説明した。2. 減法の意味について解説し, 減法が現れる求残と求差という操作を行う場面について図をもとに説明した。3. 数量関係(加法的構造)について, 全体を2つの部分に分け, 加法の場面と減法の場面について解説した。4. 乗法と除法の意味について解説し, 除法の2つの場面である等分除と包含除について図をもとに解説した。5. 数量関係(乗法的構造)について, 「単位量当たりの考え」と「割合の考え」を比較した考察が行われた。6. 計算の基本法則である加法・乗法の交換法則, 結合法則や加法と乗法をつなぐ分配法則について解説がなされた。

4. 授業研究会要録

- ・ 授業者からのコメント: 受講者数が多いので, 演習を行うことが困難である。受講者の中で, 授業「算数」を受講した学生は全体の3分の2程度であるので, 一からの授業をする必要がある。伝えたいことが在り過ぎて, 精選することが難しい。時間の短さや受講者数の多さから「学生に考えさせる授業」をすることが難しい。

以下, 参観者からの意見を箇条書きする。

- ・ 集合数, 順序数だけでよく, 測定数を持ち出す必要はない。また, この段階で量の保存について述べる必要はない。
- ・ 数量関係(乗法構造)を表わす数直線で, 単位量当たりの考えと割合の考えを説明する線分図が同じではおかしいのでは? 違う図から同じ事を言っているという共通性を強調すべきではないか。
- ・ 内容が多すぎるよりは, 少しでも学生の頭に残るように授業はピンポイントでやった方がよい。
- ・ 授業内容を減らして, 授業でやった項目の関連付けを明確にした方がよい。関連がわかってないと使えない。項目をバラバラに捉えた学生は将来, バラバラに教える先生になる。
- ・ 授業で扱う項目の目次と関連図のようなものがあればよいのでは。
- ・ 授業で話す事を割愛して, 教科書をもっと利用すればよい。学生には必ず教科書を買わせ, 教科書を読まなければならないように仕向ける。また, 指導書は高いが, 必要であり, 是非買うべきであると強調する。授業では, 教科書の中で学生が勘違いするようなことを述べるようにする。
- ・ 先生は答えを言わず, 学生に発言するような発問をする。この場合, 学生の知識量は減るかも知れ

ない。

- ・質問して、学生の間違いを正す。学生が誤答するような問いかけをする。
- ・子どもはどこで間違えるか等を問うてはどうか。子どもが間違えることに注意すべきである。

5. FD ワークショップ要録

テーマ：『良い教師を育てる授業とは』

- 教科教育と専門教育との関連
- 授業実践力と専門知識・資質との関連性

良い教師を育てる授業については上記の授業研究会要録の中でも議論されていますが、今回の特別公開授業に関連して、特に、ペアノの公理が話題になりました。たとえ小学校で算数を教えるにしても、教師は算術の原理としてペアノの公理を理解しておくべきではないか。しかし、ペアノの公理は算数数学科の学生だけを対象とした授業では行なわれても小学校の免許を取得する多くの学生は授業で軽く触れる程度である。実際、ペアノの公理を説明し、計算の基本法則である加法・乗法の交換法則、結合法則や加法と乘法をつなぐ分配法則などを証明すれば、授業でかなりの時間を必要とします。授業でこのようなことをやっても、必要性を感じていない多くの学生にとっては退屈なだけです。授業実践には大いに関心があるが、専門知識には興味を示さないと教師になってから困ります。教科教育と専門教育との関連を踏まえ、授業で何をどこまで扱うかは今後も議論していく必要があると思います。

【自然系コース（理科）】

文責：武田 清

1. 授業名：大学院「生物科学特論Ⅰ」

2. 特別公開授業

日 時：平成24年10月25日(木) 第2時限

教 室：理科授業過程実験室（C 403号室；自然棟4F）

担 当 者：米澤義彦教授

受講者数：4名

参観者数：2名

研究会・ワークショップ

日 時：平成24年10月25日(木) 第3時限

場 所：自然系教員合同研究室（C 518号室；自然棟5F）

司 会：武田 清 准教授

参加者数：5名（司会を除く）

3. 授業概要

本授業科目は、昨年度までの「細胞生物学特論」の名称を変更したものであるが、授業内容は前年度までのものとほぼ同じである。授業の目的は、真核生物の細胞構造に関する最近の知見及び遺伝情報の担い手である染色体の分子構築等について、高等学校レベルの内容が指導できる知識の獲得を目指している。

本時では、「第1章 細胞研究の最近の展開」のうち、「(3)細胞膜の構造と機能」について講じた。すなわち、すべての細胞の最外層に位置する細胞膜は、単に細胞の内外の仕切膜として存在するのではなく、細胞内外の物質輸送、細胞外情報の細胞内への伝達等重要な役割を担っている。それらの役割を担っているのがイオンチャンネルと呼ばれるタンパク質であり、また、細胞膜外の糖鎖である。

これらの知見を、これらが明らかにされてきた歴史的経緯を踏まえて講じるとともに、中学校や高校の生徒の既習事項とどのように結びつけていくかについて、考察を行った。

4. 授業研究会概要

授業を参観したのは2名であったが、授業者とFDワークショップへの参加者を含め、6名が出席した。研究会はコーヒーを飲みながらリラックスした雰囲気で行われた。

まず授業者から、シラバスと授業で配付した資料をもとに特別公開授業の内容についての概要説明があった。つづいて参観者より、授業の内容に関連して「膜タンパクが分子やイオンを物質を選択的に透過させ、必要な物質を細胞内に取り込む微視的なメカニズムはどのようなものか、水が溶媒和した無機イオンなどが膜タンパク中を通り抜けることが可能なのはどのような機構によるのか」という質問があった。これについては、「必ずしも物理的過程に関する研究の最前線までフォローしているわけでは

ないので詳細は不明である。しかし生物学関係の専門書にはそこまでの記述はない」との回答があった。これを受けて、「実際に現場に出て授業を行う場合、必要な専門的知識がどの程度要求されるのか、今回の授業内容はどの程度のレベルに相当するのか」との質問があった。授業者からは、「今回の内容は、高等学校生物の教科書に記載されているレベルであり、今回の授業内容程度を理解していないと授業を行うことができない」という回答があった。

このやりとりに対し、別の参加者から、「当然個人の知識レベルには限界がある。大学もしくは大学院で身につけるべきは、最低限現場に出たときに自ら調べることで知識をつける技能として必要な内容であるべきだ」との意見が出た。「その意味で、大学で教授すべき自然科学の知識は、教育系であろうと理工系であろうと、その内容に差はないはずである。」

今回の授業では、高等生物での生体膜の説明に歴史的経緯を踏まえて解説を行っている。これに対し、「専門的内容を教える場合、現在の到達点を教えることが重要であり、現実には歴史的経緯を教えている時間的余裕がない」との認識を示す参加者があった。内容理解を助ける方法として、科学知識の歴史的発展過程をたどるのが効果的であるというのは、理科教育におけるパラダイムのようなものである。高校生にとっては、歴史的な内容が知識を積み重ねるための足がかりとなる可能性は高い。以下は筆者の個人的意見だが、科学は理解の助けになるように順序よく発展するとは限らないことから、発展過程をたどっても理解の助けにならないこともある。従って一般論として、このパラダイムは正しくない。時間的制約を別としても、歴史的発展過程の授業利用はケースバイケースと思われる。

5. FD ワークショップ要録

授業参加に対するモチベーションおよび教科専門と教科教育との関連について

次にワークショップとして「授業への参加に対するモチベーション」と「教科教育と教科専門の関係」について話し合った。両内容を特に区別することなく出された意見を以下に列挙する。

- そもそも、大学もしくは大学院で学ぼうとするものにとって、モチベーションの有無が問題になることがおかしい。授業参加へのモチベーションが低いのは、基本的に学生の意識の問題ではないか。授業者がモチベーションを高めるような工夫をするのはお門違いである。教員どうしが話し合って答えが出るようなこともない。
- ここで問題になっているモチベーションの意味が明確では無いが、授業に出席するかどうかというモチベーションという意味ではなく、授業内容に主体的に参入しようという意欲のことだとすれば、授業内容に関連する学問的興味の高さに依存する。教員免許を取得することを目的として在籍している学生にとって、この意味でのモチベーションが高まることは容易に想像できる。
- 知的興味を喚起すること以外にモチベーションを高める方法はない。
- 教育実践重視のカリキュラムは“職業訓練”なので、学生が専門学校の感覚で入学してくることが問題である。そのような入学者に対して、大学もしくは大学院が高等教育機関であることを意識した授業を行えばモチベーションを感じないのは当然である。これは入学者選抜、学生募集の実態が抱えている問題である。同時に、実践重視に偏向した、学部および大学院のカリキュラムの欠陥といってもよい。
- 授業者としての経験では、スムーズに進んだ授業では、学生と教員双方に高揚感が感じられる。そのためにはコアになる学生がおり、講義に対して何らかの応答（発言もしくはうなずくなど）がある場

合が多い。

- 授業内容に関する課題を出すことにより、ノルマの達成を含めたプレッシャーを通じて授業参加も促されるのではないか。
- 授業その場だけのモチベーションではなく、より本質的な、学問そのものに対する意欲を見せてほしい。

【芸術系コース（音楽）】

公開授業：平成24年10月29日(月)、第2時限、初等音楽Ⅱ

授業者：草下 實 教授

授業内容：我が国の伝統音楽；箏（琴）の扱いと箏曲

研究協議：平成24年10月29日(月)、第3時限

出席者：芸術系コース（音楽）教員7名全員。（欠席者なし。）

研究協議の司会：森 正 准教授

記録：長島 真人 教授

授業の概要

初等音楽Ⅱの授業の中で2時間計画で実施されている箏と箏曲についての講義と実習の中から、第2時間目の授業が公開された。我が国の伝統音楽を扱う貴重な授業場面であった。学生一人に一台の箏が事前に準備され、学生たちは、箏を前にして着席し、授業の前半は、箏についての講義に耳を傾けた。講義では、パワーポイントが用いられ、箏と琴の定義から始まり、箏の各部の名称、弦名と柱（じ）の立て方、箏曲に用いられる音名、調弦の方法、箏曲譜（縦譜）の読み方、右手の奏法までが最初に説明された。その後、爪（角爪）が配付され、実習に移行していった。実習では、角爪を用いる生田流のほか、丸爪を用いる山田流の奏法があり、それぞれ異なった音色と味わいが生じることが紹介された。その後、柱を立てながら調弦を試みる活動が促された。ここでは、調弦に時間がかかる学生には、先に済ませた学生が直ちにサポートするように促されていた。調弦が整うと、基本的な奏法の実習が開始され、その後、箏曲「さくら」（平調子）の楽譜を見ながら、これを演じる実習に移っていった。学生たちは、最終的に、全員で、この楽曲を通して演じることができる状態にまでなった。最後に、授業者のガイドにしたがって、学生たちは、爪をかたづけ、柱を外し、楽器をケースに収納するまで、自分たちで行い、授業は終了した。

研究協議

協議は、最初に授業者の草下教授から授業についての説明があり、その後、教員一人ひとりが気づきや意見を述べ、そして、自由に討論を展開した。討論では、多様な意見が述べられたが、主たる話題は、①楽器の扱い方の指導について、②調弦について、③演奏スキル実習の指導のあり方に集中した。

楽器の扱い方の指導については、我が国の伝統音楽の世界では、本来は、作法として規範化されているが、大学の授業なので、楽器の安全な管理を念頭において、最小限のガイドで、学生たちが自分で柱を立て、自分の指にあった爪を着け、実習し、その後、爪をかたづけ、安全に柱を外し、楽器をケースに収納するように工夫されていた。高価な楽器を維持していくために、このような最小限のガイドが、今後も引き継がれていく必要があることを確認した。

この授業では、調弦にかなりの時間が費やされていた。このことに関して、調弦は、事前に指導者が仕上げているので、箏曲の実習に時間を費やすようにした方が良いのでは、という意見が出たが、授業者は、調弦自体を、我が国の伝統音楽の様式を意識させる作業課題として設定していたことが確認された。

日本人の学生は、潜在的に我が国の伝統音楽の様式に慣れ親しんでいるので、比較的容易に調弦が行われていたことが紹介された。一方、過去において、外国人留学生が箏の調弦を試みたときは、様式感が身についていないので、非常に難色を示した事例が紹介された。箏の調弦という作業には、ギターやバイオリン等の調弦とは異なる教育的な内容が存在していることを確認することができた。

最後に、今回の箏の講義と実習を扱った公開授業から派生して、芸術系コース（音楽）の全教員が関わっている演奏スキル実習の指導のあり方について、相互に意見を交わした。学生たちの演奏スキル能力の状況に着目すると、多くの学生たちが音楽作品を聴くという活動を十分に行わないままに、演奏スキル実習に取り組んでいることに問題があることを確認することができた。この問題は、特に、ピアノのように幼少の時期から練習を積み重ねてきた学生に顕著にみられることが指摘された。音楽の聴取を十分に行わないままに、音符を操作的に音にしていく作業に慣れてしまった学生は、そのままにしておくと、本来の音楽の演奏スキル実習に取り組むことができないままに大学を終えてしまうリスクを背負っている、ということである。このような問題現象を解決していくために、やはり、芸術系コース（音楽）で学生たちに育ませるべき演奏スキル能力のエッセンスを明確にしていく必要があるように思われてきた。そこで、今年度の研究協議のまとめとして、学生たちが、音楽の本質的な内容に触れながら自らの演奏スキル能力を確かなものにしていくためには、少なくとも、「聴くこと」、「解釈すること」、「つくる（構想する）こと」、「演じること」という観点から、学生たちを見守り、指導していく必要があることを確認し合った。この観点は、暫定的なものであり、具体的は指導事例を通して、より詳細に吟味していく必要があるが、今後、日々の指導を通して検討していくことになると思う。

【芸術系コース（美術）】

特別公開授業

平成24年10月24日(水) 第1時限

「初等中等教科教育実践Ⅰ」担当：武市

受講生数：11名

冒頭、山木教員より本授業スケジュールについて伝達あり。

配布物

プリント…2枚

- a, 授業の目的等, スケジュール, 授業内容（「版画について」）のポイントがメモされたもの…1枚
- b, 4版種の説明がイラスト入りで書かれたもの…1枚

授業進行

1, 授業概要説明と版画教育内容概説。

板書にスタンピングからアクアチント等までと幼児教育から中等教育までのカリキュラムにおける関係について項目書きされており、

これに従って、口頭で解説。

「本来この授業は一版多色刷りの実技制作をしているが、FDということもあるので」

という前置きがあり、

「版画を使った模擬授業」を主な内容とすることを説明。

2, 版画を使った既成授業からの選択と模擬授業計画の開始。

初等中等の複数社の教科書（版画課題に付箋がつけてある）を学生に回し、好きな（気になった）課題に名前をメモさせた。

これを集計し、3名以上の制作課題を読み上げ。

4名, 小学1年対象…スタンピング「ぺたぺたぺったん」

3名, 小学6年生対象…スプーンに映った自画像をドライポイント製作という課題

3名, 3・4年生対象…めざせローラー達人、

3名, 3・4年生対象…たのしいアニメ版画（製作行程中に順次プリントを残す手法でナラティブを創出する）

次いで課題数を模擬授業の実施可能数に絞るため決選投票。

（再度選択された課題のある教科書を回し、希望をとる）

結果は、スタンピング（4名）、スプーン（4名）、アニメ版画（3名）。

上記課題で、「模擬授業を行ってもらおう（40分）」ことを説明。

課題が決まり次第、「班分け、授業者および指導計画を進める担当」を決めさせた。

3, 予告・追加条件指示

「次回の模擬授業は低学年対象課題から実施。

授業回数が複数に渡る場合は『第2回分のみ』なども可」

随時、学生からの質問に対応。

(「ドライポイント」技法の説明，樹脂製ドライポイント版の供与，授業者以外は生徒役，ビデオ撮影の可能性の予告)

各班の「実施日」「授業者」「授業計画責任者」「生徒に指示するべき準備物・宿題」「その他の問題」を表の形に板書し整理。

4, 版画概論

冒頭配布の1枚目プリントの「版画について」部分に従って，概説。

日本と欧米の版画概念の差について。

近代以降版画（オール自作）と浮世絵との違い。

特に教育現場での近代以降版画（山本鼎）の適応。

エディション（限定部数）の説明。

授業研究会・FDワークショップ

平成24年10月24日(水) 第2時限 D202室

司会：野崎，授業者：武市，記録：内藤

出席者：栗原，鈴木，山木，山田，

最初に野崎より議事流れの説明の後，授業者による授業実施報告。(以下より会話記録とする)

武市：今回の授業を特別公開授業にするにあたって，前回の公開経験と照らし，当初木版の実技と考えていたものをシラバスの授業目的の文脈を重視し，(FDであることも意識して)模擬授業の形式を選択・実施した。他の教員にも相談，また資料を借りる等して，実施にあたった。

模擬授業形式は，結局授業運営のトレーニングになり，学生の職業意識を高めるものになるが，作品の実技制作ということから言うと残念である。今後のことを考えると，2年生の実技を絡めた授業では多色木版，銅版をやり，シルクスクリーンを外すことになるだろう。

本日の授業は予定通り進んだ。反省は特にないが(教科教育を意識して模擬授業を内容としたことに)「これで良かったのか？」という疑問は抱えたままである。

山田：冒頭少し見そこねた部分があった為，確認の質問がある。版画の種類を板書していたが，あれは学生の意見か？

武市：これは最初に自分で書いた。児童・生徒の発達段階，学校の変遷に応じて用いられる版画を書いていっただけ。

鈴木：受講生の配分は？

武市：学部生7，他院生で人間形成(L)1，美術(L)2，特別支援(L)1で，合計11名ある。経験の無い者も混ざっている所以基本から進めた。

授業研究会「教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方について」

山木：学部1年次から模擬授業を取り入れた授業を計画したのはとても良かったと思う。自分も学部の2年後期以降から（模擬授業を内容として取り入れ始めるのが良い）と考えがちだが、1年次から目的意識を持たせるのは良いことだと思った。出来る限り学生自身に色々考えさせるということが今後のためにも不可欠。また版画に関わる基本的技法について、1回目なのに効率よく伝えていたと思った。これも1年次に必要である。頭の中に広く浅くでも良いので美術の広がりについてマップが描けるからだ。図工にとって必要な技法等がどの程度あるのか、学部1年でマップがイメージできるので良かった。細部については置くとして、最初の押さえるべき所が出来ていて、とても良かったと思う。しかも教科書という具体的材料を見せることでその効果は高かったと思う。

武市：過去に実技指導育成論演習という授業（3年対象）があり、ここで山田教員とともに模擬授業計画の経験があったので、これを応用できた。

山田：凄く難しい所は、我々がこの「教科教育実践」授業に「どう関われるか」である。僕自身は（この授業での教科専門の授業内容としては）模擬授業の応用は少し懐疑的で、授業者（武市）が版画中心か指導案中心かどこを指導の中心に持ってくるかが気になる。また紙版画、木版画の教育現場での選択の理由を解説してもらえたら良かった。自分としては素材についての経験や考え方が少し違った所があった為だ。今の学生は特に紙版画も木版画、エッチングもドライポイントやっていないだろうから（自分のときは経験あるが）、検証・確認の必要があるかもしれない。

武市：確かに年々、受講生の経験は減っているようだ。ただし、それほど間違えてはいないと思う。受講生が小さい頃うけた教育を「忘れてる」こともある為だ。模擬授業の中心は、教科教育の内容にこれだけ入って良いのか心配があった。もしかすると教科教育の教員から見るとおかしな所があったかもしれない。

山田：その心配は無い。今後も我々がどう協力して行くかの問題だ。

武市：この授業の中では各受講生がどれだけ教材経験・題材経験をさせられるかは押さえたかった。用具はもとより、子どもたちの気持ちにどれだけ近づけるかも大切だと思う。

山田：版画という教材を「指導する側として経験する」ということが重視されていると。

武市：受講生は教壇に立った経験が無い。その経験に近いものを少しでも体験させられたらとも考えた。

FDワークショップ

野崎：昨年度からの課題。「学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、例えば、コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されていることについて」がFDの課題として挙げられているが、皆さんの状況はどうか？

鈴木：版画は絵画とかなり違い、面白く見る事ができた。中性インクの話等も興味深かった。学生のモチベーションの落差については、あまり感じていない。コースによってではないだろうか？前提自体が納得できないので意見が言えない。絵画Ⅰ絵画Ⅱも学生は積極的だ。

山田：どこから出てるのだろうか。

野崎：本コースではこの件に関して特に問題となっていないようなので次の課題に移ろうと思います。「教科教育と教科専門との関係、あるいは、授業実践力と専門的知識との連関性について」。

栗原：現場の授業の中で、事後に掃除をすることまでも人間形成に必要なだが、なかなか実際に出来ないか

もしれない。でも一番削ってはいけないのにも関わらず排除されてしまう現実があると思う。実際の作品制作の時には事前の準備から事後処理までであるので、人間形成の目的としても自分の授業では出来るだけ取り入れて行きたい。「大学生として当然判っているだろうことが出来ていない」ことが多いので、継続して行きたい。

武市：現在はしぼんでいるが、版画を学ぶのではなくて「躰」として受け取って欲しいと学生にも説明を行った事が有る。

鈴木：計画段階で専門部会に参加したため当初の構想が判るのだが、最初は「初等中等教科教育実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は専門の教科内容学を中心として現場にフィードバックさせることを目的に作られたはずだ。制作や絵画鑑賞等をどう現場に還元させるか等を実際やってみて考えるとずいぶん難しいことだなと思う。

野崎：教科専門の教員にとっても色々変化があると思う。

山木：図画工作科教材研究などの授業では、教科専門と教科教育が分担していて指導法と技能をともに獲得できること目指したものである。技法上のかなり詳しいことも出てきているが、なかなか時間がなくて実技制作の時間が織り込めない。技法技能の基礎力、現場での題材理解の面等でも、専門と教科教育は重複するものだ。その部分をお互いにどう組み立てて行くのが重要だと思っている。

一番まずいのは、「教科専門のあの教員がやってくれているだろう」「教科教育だから、あの教員がやっているはずだ」などの思い込みによって、大事な内容を省いてしまうことをコース内でお互いがしてしまうことであり、それこそ真に避けるべき事態だ。だから本日の授業のような重複は空白が出るよりはずっと良いことだと考えている。

武市：内心は学生たちが「紙版画」以降の「ドライポイント」などの課題内容を選択してくれればと思っていた。技法などで指導できるからだ。しかし「スタンプ遊び」になると造形遊び（幼児から小学校低学年対象）に近くなり、どう指導すれば良いかを改めて勉強しなければならなかった。

野崎：確かにこの授業において小学校の低学年、中学年（初等中等教科教育実践Ⅰ）を対象とせよと言われた時には大変困った。現場と関わった経験の無い専門教員がこういうことを教えるのは無理があると思った。僕ら専門がやることは学生に造形の基礎的な力をつけてやることだと考えている。とはいっても、現場の造形遊びを念頭に置いた課題を考え、直接的ではないが、基層として造形遊びを理解できるようにしている。そのために造形遊びの出自をたどり、現代美術を理解すること、現代美術に触れていこうと考えた。

山木：現場そのものの知識が不足、ということについては、自分自身はもう少し、専門教育の教員が現代の学校教育の内容に対し積極的に発言した方が活性化できると思う。教科教育の教員のやっていることをあまりに信頼してしまうと、美術教育全体が自閉した状態になってしまう。専門の教員からも「ああいうことをやったら？」など新しい提案をどしどししてもらった方が良い。

野崎：「基礎的な力」を備え「図画工作、美術の必要性」を言える学生が出てくれることが基本的な願いです。

また、我々の授業を受けたことで、新しい題材開発を積極的に行うことができる学生が出てきてほしい。

山田：自分は教科教育分野だが、前提としてコースの各教員と自分の関係性は凄く良好だ。やはり教員養成大学なので、皆が現場を理解する基本的努力目標は理解しなければならないだろう。しかし皆、

積極的に研究会等にも参加し、クリアできている。自分はこのコア科目が自分たちに求めているのが「仲間との対話」だと考えている。自分が学生ときは担当だった先生方はもっとバラバラだった。ここでは自分たちでそれを考えることを求められている。今日、ひとつの形が示されたが、授業の中で特に冒頭の板書の部分（児童生徒のレベルに応じた技法を具体的に示したこと）等は大変面白かった。だからこそもっと深めて欲しいと感じた。もっと「現場の先生はこんなことしないんだよね」というのがあっても良い。これによって「現場の活動の意味付け」「大学での専門の技術獲得の意味付け」が出来たらより良いと思う。逆に教科教育に課せられているのは「現場を伝える」ことだけでなく、「伝えられることの意義」、「将来その子たちがどうなるか」という意味付けが必要になっている。この辺りは自分自身も十分自戒が必要だ。このあたりがコアの重要性だ。

内藤：冒頭の板書が良かった。

教員のチームワークは非常に良く、色々勉強があった。

「その他の課題として」

内藤：本学は教員養成大学として専門学校的になってきてさえいる。学生のことを考えても、当然教員採用対策は必要だが、専門の制作・研究を通して人間形成を得られる場合も多く、自分たちもその経験を負ってきている所から、悩む所だ。また、教員も学生も仕事内容が増えすぎているように感じられる。一旦すべて整理して、大切なものから並べ直しても良いのではないか。

山木：主体的知的好奇心を学生に獲得して欲しい。授業の中での教師の脱線を楽しんだり、知識に自ら手を伸ばすような主体的興味を形成させるような学生を育成してみたい。



【生活・健康系コース（保健体育）】

1. 特別公開授業名：運動方法実習VI（バスケットボール）

2. 授業日：平成24年10月29日(月) 第5時限

教室：体育館

担当：梅野圭史 TA：長田則子

受講者数：学部1年生11名，学部2年生9名，大学院生8名，計28名

参観者数：6名（賀川，田中，藤田，南，吉本，乾）

3. 授業概要

この授業は小学校および中学校の児童・生徒に対する学習指導に焦点を当て、バスケットボール教材による学習指導改善に資する実技指導能力を育成することを目的としている。具体的には、グループ学習を中心に作戦・戦術を高めていくとともに、児童・生徒に対する戦術学習の指導方法を理解することである。本時はシラバスに示した第3週目の授業であり、本時のねらいはパサーとサポーターの位置取りとパスのタイミングを考えて、1:0でシュートすることができることである。本時の学習内容は以下のように展開された。

16:20 - 16:25 ① 本時のねらいとその留意点を知る。

16:25 - 16:35 ② 各チームでストレッチをする。

16:35 - 16:55 ③ ドリル・エクスサイズをする。

16:55 - 17:05 ④ 教師と学生との話し合い①（教師を中心として）

17:05 - 17:10 ⑤ チーム毎で作戦を立てる。

17:10 - 17:20 ⑥ 3 on 3のゲームをする。

17:20 - 17:25 ⑦ 教師と学生との話し合い②（審判を中心として）

17:25 - 17:30 ⑧ チーム毎で作戦を立てる。

17:30 - 17:40 ⑨ 3 on 3のゲームをする。

17:40 - 17:50 ⑩ 教師と学生との話し合い③（プレーヤーを中心として）

4. ワークショップの概要（記録者：乾）

以下のような感想が寄せられた。

賀川 教員：

学生の運動意欲は全体的に高く、授業時間を通じて積極的に活動していた。そういった点では、受講生の技能向上に寄与できる授業であったと思われる。しかし、実技指導能力を育成するという観点からすると、決められた動きをドリル的にこなしているという印象が強く、もう少し自分たちの動きをチェックするゆとりがほしい気がした。

コンビネーションプレイについては、各グループともにバスケットボール経験者が中心になってア

ドバイスをしていたが、それ以外の者からの働きかけは少なかった。いわゆる「その運動が不得意な者」に技術認識やつまづきに対する気づきがどれだけ生まれるかが指導者を育成する上では鍵になると思われる。そういった意味で、履修生のプレイ状況を動画でフィードバックする等の機会があれば、不得意な者からも積極的な働きかけが引き出せたのではと思われる。

授業のまとめで「コア・モデルによる作戦立案」が子どもの学習指導に役立つとのことであったが、今日の授業だけでは、それがどのような形で授業づくりや授業の運営に役立つかは分からなかった。この点については、多分、これからの授業で詳細に示されると思われるので、今後の授業展開に期待したい。

吉本 教員：

参考になった点：

- 授業の最初に、板書された目当てを学生に声を出させて読ませていた。読ませることで各自が目当てをしっかりと確認できているようであった。
- ゲームの後、学生自身が審判、プレイヤーとしてゲーム展開に関して評価していた。学生の理解、観察能力を向上させるのに有効な方法だと思われる。
- 最後に、ボールゲームを小中学生に教育指導する時の留意点として、チームでボールゲームを実際させた場合、一つ一つの技能や考えた作戦などが忘れられ、ゲームが遊びになってしまう事が多いので、そここのところを見逃さないようにする事が重要であると説明された。実技は楽しい方が良いが、学習であって、遊びではない。この点は、今回のボールゲームのみならず、グループ討議や演習、実技等の授業にも適応できる、重要な留意点として考えられ、自分の授業においても常々、念頭に置き、学生にも伝えておきたいと思った。
- 全体として、バスケットボールゲームが段階を経て習得できるように授業内容が構成されていて良かった。

意見：

- チームで作戦を考えさせたが、作戦のコツ、具体的な内容が示されていなかったように思う。これまでの授業で作戦について説明済みであったかもしれない、また、学生はバスケットを経験した事があるものが多かったためか、本授業では特に問題なくゲームを行っていたが、児童生徒にとっては、難しいように思われ、作戦の立て方をもっと具体的に教える必要があるのでは？
- ドリル・エクササイズの間、音楽が流されていた。児童生徒への授業においてもこの方が良いと言う事なのか。音楽を流す意義が良く分からなかった。

藤田 教員：

運動量が豊富な授業に感心しました。特に、「ポルノグラフィティ」の楽曲をBGMにして、ミドルシュート、2対1のパス&ガードなどのドリル・エクササイズを行っている場面は、リズムに乗っていてよいと思いました。

各チームが、3 on 3のゲームの前に立てた作戦の中で、工夫された作戦を抽出し、受講者間で共有させる場面が必要ではないかと思いました。

南 教員：

授業展開について

- ・班毎での準備体操，ミドルレンジからのシュート，ドリブルシュート，3線などはよく指導され，学生が積極的に動いていた。
- ・ガードを「外す」「外れない」「外れる」等のパターン化を示すなどわかりやすく提示されていた。
- ・本時の目的を学生に伝え，学生も話し合いなどで活用していたように見受けられる。
- ・ガードの基本を理解できていない学生がおり，授業目的の前提となる「外し方」に至っていないゲームが散見された。
- ・チームの分け方に男女，体格，習熟度などに差があるように思われた。
- ・学生の感想が勝敗に起因するものが多かった。今後コア・モデルが提示され，積極的・具体的に意見が出されると思われる。

安全面について

- ・眼鏡，ピアスをしたままの者がいた。
- ・危険予測について，リング下や他のコートにボールが転がった時，反射的に声を出すよう指示しても良いと思われる。
- ・ぬれ雑巾の使用や授業前後でのモップがけなどが必要だと思われた。

乾 教員：

「本時の目標→Warm-up→ゲームでの留意点→作戦立て→ゲーム→ゲームの反省→作戦立て→ゲーム→まとめ」という授業展開は授業の基本を押さえており，熟練した授業者の技量がうかがえた。受講生は体育の専攻生であるので，総じてよく動いているが，「よく動いているが良い動きができないもの」と「あまり動かないが，良い動きができるもの」が散見され，前者のものをどのように扱うのが1回の授業では見えにくかった。

【生活・健康系コース（技術・工業・情報）】

1 特別公開授業名

木材及び木質材料学

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

授業日（曜日）：平成24年10月25日（木） 第4時限

教室：C 104 教室

授業担当名：米延 仁志

受講者数：4名

参観者数：3名（畑中 伸夫，宮下 晃一，宮本 賢治）

3 授業概要

趣旨と目的：本学の教員養成では、ものづくりの技術の活用能力を実際の教育活動に生かす資質・能力を育成することを重要な目標としてあげている。本講義では木材の構造、理化学的・機械的性質を理解し、それらを基礎として身のまわりにある木質系複合材料の構造、性質、製造方法及び用途について学習する。さらに、生物資源としての木材の特徴、木の文化についても学習する。

到達目標：学校教育でよく利用される木材及び木質材料の基本的な物性と特徴を理解し、これらの知識を学習指導で積極的に活用できる基礎的な能力を養うことを目標とする。

主な対象：学部3年生

本時の内容：木材の基本的な性質（構造、材質等）ともものづくり教育との橋渡しの役割をなす。講義は樹木の成長様式から始まり、成長の結果としての細胞組織構造を電子顕微鏡にて撮影した写真を見せ、その構造に基づいて木材がどのように加工されるべきか、中学技術で扱われている材料加工の背景的・基礎的な知識となる内容について非常に分かりやすくかつ興味深く講義された。

4 授業研究会・FDワークショップ要録

授業研究会・FDワークショップ研究会では、教育内容に関する討議を行った。詳細は以下の通りである。

- 1) 中学校学習指導要領において、技術・家庭科の目標は「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる」と明記されている。これを意識して、日常生活の身の回りにあるものや自然現象と教科専門科目の関連について言及する学生は多い。しかし、その一方で日常生活の身の回りにあるものや自然現象に対して興味・好奇心が見られない点が問題であると指摘された。その結果、背景・基礎知識の欠如や体験不足のため、大学での講義においても実際に学生の目の前で実験したり実物を見せても驚嘆したり感動したりする等の反応がほとんど無い。

- 2) さらに、日常生活で使われている機械や電気機器などの構造や仕組み・原理についての興味・関心が薄く、ものを製作する側というよりはものを使う側の立場に関心の重きが置かれているという指摘もあった。これについては、ものづくりとは何であるかに対する意識や考え方が従来と異なるのではないか（例えば情報化・デジタル化社会を反映して、機械工作や電気工作よりも、むしろ動画などを取り扱ったデジタルコンテンツの作成がものづくりであると考えているのでは？）という意見もある。いずれにせよ、ものづくり教育が衰退する方向にあることが懸念される。
- 3) 上記1), 2) の事項を踏まえて、現場での解決能力、応用力の低下や教科書・指導書に書かれている通りにしか教えられないという“授業のマニュアル化”も指摘された。またものづくり教育では、安全教育、すなわち実習室の保全、工具や機器の安全な使い方等についても、大学で十分に教えないと、学校現場での事故や火災、生命の危機等につながる。本学の掲げる教育実践力の育成が極めて危機的な状況にあると考えられる。
- 4) 昨年度のFD推進事業において実施された特別公開授業の結果、専攻・コースを超えた共通の課題の1つとして、学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、例えば、コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されている。しかし、学生の意識は教科専門科目よりもむしろ教採突破の方が優先度の高く、本来あるべく大学の教養・専門教育が衰退し、就職のための専門学校化しつつある点が、今回のFDワークショップで指摘された。また近年は、教採合格者について卒業研究は何もしなくても卒業できるという意識を持った学生が少なからず存在するという点も専攻・コースを超えて指摘されており、大学として非常に憂慮すべきである。
- 5) 近年の理数離れの反映と考えられるが、「(教科専門科目の授業の中の) ~の分野は嫌い」「高校のときは文系だったので~はできません」等、将来教師となる上での資質・姿勢・心がけとして疑われるような不適切な意見・考えの学生が少なからずみられる傾向にある。

【生活・健康系コース（家庭）】

1 特別公開授業名 「住居学概論（製図を含む。）」

2 平成24年10月25日(木)・C105・金貞均教員担当・17名受講・3名参観

3 授業概要

○授業の目的及び到達目標について

本授業は、人間生活の基盤である住居を各分野から総合的に概説し、住居領域の基礎的実践力を養うことを目的としている。住居と住生活に関する基礎知識の修得および課題探究を通して、①住居と住生活に関する基礎知識を理解し、説明できる、②住生活問題を認識し、改善方法を提案できる、③健全な住意識や的確な住要求を身につけることを到達目標とする。

○当日の授業概要について

この授業科目は、中学校および高等学校教育職員免許状（家庭）の教科に関する科目である（学部1年生を主対象）。受講生は、学部生として家庭科教育コース9名、技術科教育コース3名、院生として家庭コース4名、美術コース1名、特別支援教育専攻1名の計18名であり、1名が介護等体験実習のために欠席していた。

日本の住居と生活様式の形成・発展の様子を時間軸から概観してきた計3回の授業に引き続き、空間軸から住まいを捉える計5回の授業中第1回目の授業を公開した。

空間軸（住空間構成や使い方等）から快適な住居の機能や役割について探究することで、「具体的に住生活空間をイメージする能力」と「住生活を構成・展開する能力」を高め、居住力の向上をめざす。授業テーマは「生活行為と住空間構成（空間軸から住まいをみる①）」で、授業の前半は住生活行為と絡めた住空間構成原理について講義し、後半は3グループに分かれ、「住まいづくりワークショップ」を行った。ワークショップのねらいは住まいに必要な条件を帰納的に整理し、理解することであり、グループでの意見交換を通して知識を共有し、より理解を深めることができた。最後には「条件」を形にした住まい図を発表し合い、グループ別共通性と違いを確認した。

本授業を通して前半の講義で扱った理論（知識）を2次元の住まい図で広げ、つなげることで住まいの全体像をつかむという所期の目的は達成されたと考える。

4 授業研究会要録

10月26日(金)9時～10時30分まで、家庭コースの教員が参加して、授業研究会・FDワークショップを開催した。まず、特別公開授業を担当された金先生より授業概要についての説明があった（上記3を参照）。その後、授業内容について各教員から自由に意見を述べた。以下に発言の概要を記載する。

- ・住まいづくりワークショップを行った時の学生のグループ分けの意図についての質問があった。それに対し、学部生と院生、家庭コースの学生と他コースの学生が混ざるように3グループに分け、各リーダーも指名をしたが、これは固定的なグループではなく、今後の授業の中でメンバーを変更して

いくとの説明があった。様々なメンバーで話し合うことで、いろんな意見が出て新たな「気づき」が生まれるとの説明があった。

- ・学部生と院生が混ざり、活発に話し合いができていたかという授業の様子についての質問があった。それに対し、協力し合って話し合いができ、最後にはまとめもできていたとの説明があった。また、今回のワークショップは、議論ではなく、様々な意見を出し合うことから合意形成をしていくことがねらいであったとの説明があった。
- ・ワークショップの時に、設定条件を一軒家であるとか、家族構成なども決めて提示した方がわかりやすかったのではないかとの意見があった。それに対し、一人住まいではなくて、家族の住まいであるとの条件だけを提示している、それは、学生のこれまでの経験（核家族、祖父母と同居など）から、いろいろな意見を自由に出してほしかったからであるとの説明があった。今回の授業は、家の全容を把握し、空間のつながりを学ぶことをねらいとしており、次の課題では設定条件を4人家族として考えさせる予定であるとの説明があった。
- ・最初に授業のねらいの説明があり、プリントを用いたりワークショップを行うなど、いろいろな手法が取り入れられており、学生にとっては飽きることなく授業が受けられた様子であった。しかし、90分の授業内では内容が多く、盛りだくさんの感があり、授業者が期待するレベルと、授業を受けている1年生のレベルに差を感じた。ポストイットに記入する時に、もっと具体的な説明をした方がわかりやすかったと思う。
- ・今回の授業と同じく18名での授業を担当している。その授業では、約20分間の講義の後に、その学んだ知識の定着を確認するためにグループ討論を取り入れている。これまでグループ分けを座席で区切って行っており、メンバー構成やリーダーについては特に意識をしていなかった。今回の授業を参考にしたい。また、グループでの議論を大切にしていきたいと思った。
- ・今回の授業と同じような内容が、3年生の主免教育実習の時に附属中学校で行われていたが、ポストイットの記述内容は、中学生と大学生ではかなり違うのかとの質問があった。それに対し、やはり中学生と大学生では、生活経験の違いでかなり書く内容は異なり、大学生の方がより詳しく様々な意見が出ていたとの説明があった。
- ・院生が活発に発言している様子が見られたが、院生の人数が多かったためかもしれない。これまでは、学部の授業に院生が参加すると、聴講しているだけという姿勢が見られたが、今回のように学部生と院生とが混ざって話し合うことは互いの刺激となってよいことだと思う。
- ・住空間構成には、正しい答えというものがあるのか、授業ではどこまでを教えるのかとの質問があった。それに対し、空間構成を考える際には機能性を考え、ゾーニングや動線を考慮して組み立てていくが、その機能性を考えた基本的なことは押さえておく必要があるとの説明があった。
- ・最後に授業者から、90分の授業時間では目いっぱいの内容だったので、受講生1人1人の理解度を確認しながら進めることはできなかった。次の授業で補いたい、との説明があった。

5 FD ワークショップ要録

授業研究会に引き続き、FD ワークショップを開催した。今回のテーマは「よい教師を育てる授業とは－教科教育と教科専門との関係、授業実践力と専門知識・資質との連関性－」であり、この他にも「学生の授業に対する意欲・モチベーションについて」と、「教科教育と教科専門との関係、授業実践力と専

門的知識との連関性について」も議論することとなっていた。各教員から、テーマについて活発な意見が出された。以下に討議の概要を記載する。

- ・今回提示された課題の「学生の授業に対する意欲・モチベーションについて」の中で、例として「コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されていることについて」とあり、最初にこのことに対して意見交換を行った。授業の受講人数に関係するではないかとの意見があり、少人数では意欲が見られるのに、大人数になるとモチベーションが下がる様子が見られるとのことであった。また、家庭コースの授業では、コア領域の授業よりもむしろ、教科専門の方が意欲的であると感じられるとの意見があり、参加者全員が共通に感じていた。
- ・他コースの学生と比較すると、家庭コースの学生の特徴として、家庭科が受験科目ではないということもあり、高校までに十分な学習ができていない状態で大学に入学してくることがあげられる。そのため、家庭に関する基礎的な知識が十分に身につけていない。模擬授業をさせても、知識がないために先生役も生徒役も戸惑うことが多く、できるだけ模擬授業の機会を多く取り入れた授業展開をしているが、模擬授業後には、知識の確認をする時間も必ず設けるようにしている。
- ・授業実践力というが、実践力を身につける以前に、専門知識を十分に身につけないと、それを実践に結び付けられないのではないか。
- ・特に家庭科は専門分野がとても多く、しかもその内容が幅広い。知識を統合していかなければならないが、衣食住などの生活をつなぐのが消費生活である。しかし、消費生活に関する授業を選択する学生が少ないのが実情である。学生の家庭科の学びへの意識を高めていかなければならない。
- ・学生には、できるだけ専門教科の授業を受けるようにすすめている。大学に入学してきて家庭科の専門分野の授業を受けて、初めて家庭科の面白さに気づく学生もいる。
- ・現在の学生は生活経験が少なく、知らないことが多すぎる。生活感がなく、言葉（生活用語）を知らない学生も多く驚かされる。様々な生活経験をさせるようにして、また、繰り返して教えていく必要もあると感じる。
- ・すぐに役立つことばかりを教えると、すぐに役立つなくなってしまうということも考えられる。よい教師として育っていくためには、基礎的なことを十分に身につけさせておく必要がある。
- ・模擬授業をすることで、授業をするのに必要な知識を深める必要性を自覚することができる。生活経験が少ない学生にとって、経験させることは大切である。これからも模擬授業の機会を設けて、教科教育と教科専門とのつながりを大切にしたい授業を行っていく必要がある。

以上、各教員が学生に対して日頃から感じていることや、教科教育と教科専門との関係等についての意見を交わし、共有することができた。今後、学生を指導するうえで非常に役立つ特別公開授業およびFDワークショップであった。



【国際教育コース】

石村雅雄

0 はじめに

本年度、我がコースでは、次のとおり、FD活動を行った。

この計画については、コース会議で内容を検討し、

- ① 本コースは、本国で教員である多くの JICA 長期研修員を含み、かつ、彼ら／彼女らがこうした授業改善の試み、そのものを研究対象としているため、この活動を彼ら／彼女らを含めた学生を巻き込んだものとする。
- ② そのため、コースの全員が参加している総合ゼミ（授業名：国際教育総合セミナーⅡ）の10月22日の授業においてこの活動を実施すること。
- ③ FD活動の基本を各教員・学生の自省を中心としたものとして設計すること。
との内容で、実施することとした。

1 FDコーディネーターによる説明

まず始めに、コーディネーターの石村が、参加者全員に、この活動に関する説明を行い、協力を求めた。

2 通常の授業の実施

本コース小澤大成教授による“Lesson Study in Mpumalanga Province, South Africa”と題する講義が行われ、質疑応答が為された。

3 全員による授業リフレクションシートの書き込み

授業終了後、次の内容のリフレクションシートについて、全員（小澤教授を除く）の書き込みを求めた。

【資料1】

Student Reflection Sheets

Name:

E-Mail address:

Date and Period : 1:00-2:30 p.m.,22 October 2012

We would appreciate your feedback when this class is finished. Please write down your thoughts on the following

three areas.

- 1) What are things you have learnt and discovered ? (for example: “Ahh, now I understand ..”, “The reason for this is ..”, “This means ..”, “In other words, ..”)
- 2) What are questions you had when the class was finished, and things you want to check with the teacher ? (for example: “I don't understand”, “Doesn't this mean ..?”, “But isn't this?”, “What happens if ..?”, “I thought this meant ..?”)
- 3) What are things you'd like to think about more or investigate further now that the class is over ? (for example: “I'd like to think more about”, “I'd like to consider the case of”, “I'd like to read further about”, “I'm going to review”)

Thank you for your cooperation !

4 リフレクションシートの回収

記入してもらったリフレクションシートについては、小澤教授に渡され、コーディネーターの石村から、後日この資料にも基づいて、今回授業の授業者としてのリフレクションをインタビュー形式で行うことが伝えられた。

5 授業者による授業リフレクション報告

コーディネーターによるインタビュー調査の前に、授業者によって次のようなリフレクション報告が為された。

【資料2】

【参加者のリフレクションシートから】

1) 学んだこと

「授業研究について学んだ」というコメントが多かった。その中で「2種類の授業検討会のうち、ワークショップタイプが広く意見を捉えるのに有効」「授業研究では生徒の達成度に注目することが重要」「授業記録の重要性」「授業観察力・分析力に課題」「一般的なコメントが課題」「教師の積極的な参加に課題」などに着目していることがわかった。さらに「実践と研修がつながっている授業研究を継続的な教員研修プログラムに組み込むことが重要」と自国の課題にひきつけて考察を深めた参加者もいた。

2) 質問したいこと

プレゼンテーションで用いた表や南アの授業研究のさらなる実態に関する質問が多かった。「生徒の考えを生かす実践につながる教員研修」「教員研修による教員の資質向上」など視点を広げた質問もあった。

た。

3) もっと学びたいこと

「さらに授業研究のことを学びたい」という意見が多かった。具体的なコメントとして「現地の学校状況を踏まえた授業改善につながる教員研修を知りたい」「仏語圏での授業研究」があげられる。また「活動に基づく授業により生徒の成績は向上するのか」という視点もあった。

【授業者のリフレクション】(番号は、石村による)

- 1) 授業者の講義後、参加者は積極的に質問し、さらにリフレクションシートにも記入を行っており、意欲が感じられた。専門的な科目に関するモチベーションの低さという課題は全く感じられなかった。
- 2) その理由として、参加者は途上国の教育関係者が主たる参加者であり、南アフリカにおける授業研究の実態に関する講義内容は、自国に応用可能な継続的かつ授業改善に資する教員研修方法を普段から考えている参加者にとって専門的かつ有用な内容であり、そのため積極的に参加して深く理解しようとしていたと考えられる。
- 3) 講義の反省点としてはスライドで示した表に関して数値の算出方法の説明に課題があり、もっと詳細に説明することが必要と考えた。

6 コーディネーターとのインタビューによる授業者の授業検討

上記資料に基づいて、本コースFDコーディネーター(FD Coordinator:以下C)と授業者(Professor:以下P)による授業検討が行われた。

まず、Cから、この授業で自分として良かったと思う点を指摘して欲しいと要請された。Pは、「相互に高め合う」姿勢が授業方法としても提示、また、実際に共有することができ、それが、今時講義内容とうまくリンクしてできたのではないかと、このことであった。確かに、講義後の質疑応答は非常に活発で、参加者によるリフレクションシートへの書き込みも活発であった。このことについてさらにPは、「教室の改善というのは、世界共通の課題であり、議論がしやすかったのではないかと」分析した。この点は、上記、リフレクション2)でも指摘されている。

また、この他に、授業研究をする視点、構造を提供できた点も、良かったのではないかとPは指摘した。

授業をして、上記リフレクション以外に気付いた点としては、授業改善の成果(成績等)にまで研究の視野を広げて分析していくことが述べられた。

その後、PとCによる、本コースの授業改善についてのフリーディスカッションが行われ、まず、リフレクション1)に書かれた「専門的な科目に関するモチベーションの低さという課題」について議論した。Pは、本コースでは、授業スタイルが、受講生にあわせる(学生の意欲・モチベーションにあわせた授業内容・方法の提供)ものとなっており、かつ、内容的な強制性が低いので、このようなことになっているのではないかと分析が為された。Cからは、数学や理科における、実際の教育現場では「役に立たない」といわれる専門的な内容の習得の問題が指摘されたが、Pからは、それは、学生の能力を超えた授業提供が行われているのではないかと、かといって、数学、理科の場合、授業内容の積み上げが

重要であり、専門的な内容を疎かにできないので、何とか、うまくやっていく（本学の実際の授業を紹介しながら議論された）必要があるのではないかとの意見が出された。この問題については、①そもそも、コースの授業構造が曖昧、良くいえば、自由であること、②本コースでは、本年度から新カリキュラムが施行されており、こうした積み上げに注意しながら、本格的に実施される（L1については、本年度はまだ本コースの授業を受講していないため）来年度以降、授業をしていく必要性が確認された。

7 まとめにかえて

昨年度の本学FD報告書で理科コースが実験等について「(すでに、お膳立てされており、自分自身の準備や操作がほとんどないもの)は喜んで行すが、その背景にある法則や論理に興味がない場合が多い」とか、「いわゆる“教育学部向けの専門内容”を講義することに違和感がある。学問内容に“理学部”も“教育学部”もないわけで、それらの相違を意識する必要もない。またある程度わかりやすい説明などを行った場合、必ずそこには条件設定や近似が入ってしまい、正確さが失われてしまうことが多々ある」との指摘があった。本コースで行われた本年度の議論もここに関わるものである。本コースの授業は、後に記すとおり、カリキュラム改革が進行中であることもあり、この面での問題点の認識は低いし、学生を観察しても、問題が所在するとは考えにくい。学生は、外国人学生が多いこともあるが、全体的に授業に対する意欲は高い。昨年度も記したが、本コースの授業の特徴は、本学全体の授業にも繋がることであるが、大学で提供される授業の構造が、小学校、中学校で、受講者が行う授業検討会の構造に、合わせ鏡のように存在することである。授業内容として提供される授業検討会の検討（授業内容）の検証（このFD活動）が、そのまま、自らがコーディネーターとして実施している授業検討会の実践に繋がっていくという構造である。この点をうまく生かしてFDを展開していく必要性が引き続き感じられた。授業内容としても、今回のFDツールである参加者リフレクションシートを入れることによって、日常の授業内容と比較して、より活発な質疑応答がなされたことに注目したい。通常、授業「内容」に則して行われる議論が、授業を「客観的に」観るツールが入ったことで、授業「方法」等にまで広がって議論されたのではないかと思う。このことは、授業参加者の教育実践力の向上にも有効であると考えられる。

来年度FDに関しては、この点をより意識し、参加者に対する事前の説明をより詳しく行い、こうした構造の議論も含めて実施できたらと考えている。

Ⅲ 平成24年度特別公開授業に係る全体会

平成 24 年度特別公開授業に係る全体会実施要項

1 目的・意義

平成 23 年度の F D 推進事業は、①公開授業、②特別公開授業、③授業研究会・F D ワークショップ、④講演会・シンポジウムの 4 つが実施された。

この中で②の特定の授業を公開する特別公開授業は、専攻・コースを単位として実施した。その結果、専攻・コースを超えた次のような共通の課題が出された。(ア)学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、例えば、コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されている。(イ)教科教育と教科専門との関係、あるいは、授業実践力と専門的知識との関連性についてである。これらの論点は、平成 24 年度の特別公開授業でも出てくる課題とは必ずしも言えないが、教員養成大学の F D 推進事業として取り上げ議論すべき課題となる。

そこで、平成 24 年度は、平成 23 年度に実施した④講演会・シンポジウムに代わり、特別公開授業に係る全体会を開催し、上記に示した専攻・コースを超えた共通の課題(ア)(イ)について、各部から発表していただきながら課題を展開することで、授業改善等につなげることにした。そのため、本年度の各専攻・コースの授業研究会・F D ワークショップにおいて、昨年度出された専攻・コースを超えた課題を論議していただき、もしも本年度新たに出された課題があれば、それを含めて全体会において発表することとした。

2 対 象 者 本学全教員

3 期 日 平成 24 年 10 月 31 日(水) 14 時 40 分～ 16 時 10 分

4 会 場 B 101 講義室 (講義棟 1 階)

5 発 表 者

- ①基礎・臨床系教育部 「学生の授業意欲、実践と専門知の関連」
人間形成コース 梶井一暁 准教授
- ②人文・社会系教育部 「人文・社会系教育部のワークショップから考えること」
社会系コース 町田 哲 准教授
- ③自然・生活系教育部 「ものづくりのためのよい教師を育てる授業とは」
生活・健康系コース (技術・工業・情報) 宮本賢治 准教授
- ④芸術・健康系教育部 「教科教育と教科専門の関係」
芸術系コース (美術) 内藤 隆 准教授

6 日 程

時 間	内 容
14:40 - 14:45	開会挨拶 (西園理事)
14:45 - 14:50	趣旨説明 (司会者)
14:50 - 15:00	発表①
15:00 - 15:10	発表②
15:10 - 15:20	発表③
15:20 - 15:30	発表④
15:30 - 16:00	全体討議
16:00 - 16:10	閉会挨拶 (西園理事)

FD推進事業全体会

(司会 吉井 健治) それでは時間になりましたので、只今より平成24年度FD推進事業の全体会を行います。それでは、最初に開会挨拶を西園理事よりお願いいたします。

(鳴門教育大学 理事 西園 芳信)

先生方、こんにちは。この「24年度特別公開授業に係る全体会」の開催にあたって、学部・大学院FD委員会の委員長として、最初にこの全体会の目的・意義について、若干説明をいたします。

お手元にあるかと思いますが、平成23年度のFD推進事業は1つは「公開授業」、2つに「特別公開授業」、3つとして「授業研究会・FDワークショップ」、そして4つとして「講演会・シンポジウム」、この4つを実施いたしました。この中の2つ目の「特別公開授業」は、専攻コースを単位として実施されました。その結果、次のような専攻コースを越えた共通の課題が出てきました。

その課題とは、1つは学生の授業に対する意欲・モチベーションについてです。あと1つは教員養成大学の課題ですけれども、教科教育と教科専門との関係、あるいは授業実践力と専門的知識との関連性ということです。これらの課題は平成24年度の特別公開授業で必ず出てくる課題とは言えませんが、教員養成大学のFD推進事業として取り上げ、議論すべき論点と捉えました。

そこで、平成24年度のFD推進事業は「講演会・シンポジウム」に代わりまして、特別公開授業に係る全体会を開催し、いま申し上げました共通の課題について各部から発表していただき議論することで、授業改善につなげることにしました。そのため、今年度の各専攻コースの授業研究会・FDワークショップにおいて、昨年度出されました専攻コースを越えた課題を議論していただき、もしも本年度に新しい課題が出せれば、それも含めまして本日の全体会で発表していただくということにいたしました。

以上のような趣旨・目的の下に、各教育部を代表して発表をいただきます。その方は基礎臨床系教育部の梶井一暁先生、人文・社会系教育部の町田哲先生、自然・生活系教育部の宮本賢治先生、芸術・健康系教育部の内藤隆先生です。忙しい中を発表の準備をしていただき、心より感謝を申し上げます。

先生方の活発な議論によって本学の授業実践から出された課題を各先生方が共有して、少しでも授業改善につながることを期待しております。どうかよろしくをお願いいたします。

(司会 吉井 健治) ありがとうございます。それでは、司会者は臨床心理士養成コースの吉井です。私は大学院教務委員でFDの副委員長をしております関係で、本日の司会を務めさせていただきます。思った以上にたくさんの先生方に参加していただいて、ホッとしているところです。ありがとうございます。

それで、本当に短時間なんです。1コマ90分の中で短い時間ですが、FDに関して大事な議論ができれば良い会になるのではないかという風に思います。それで4つの部から代表の先生方に発表していただきますが、各コースの意見を集約して発表される先生もおられれば、1つのコースの意見をまとめて発表されると、その発表のスタイルはお任せをしておりますので、色々な発表の仕方があると存じます。

それでは、非常に短い時間で1人あたり10分間という持ち時間なのですが、タイムスケジュールよ

りも少し早めに進めますが、それではまず最初に人間形成コースの梶井先生、よろしくお願いします。

(人間形成コース 准教授 梶井 一暁)

人間形成コースの梶井です。よろしくお願いいたします。資料は1枚だけですけれども準備していますので参照いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

先日、コースの特別公開授業とその授業研究会を行いましたけれども、そこでの議論は十分整理しきれていないので、ここではこれまでの授業担当者としての一般的な経験を踏まえて少し話をしたいという風に考えております。

1つ目は、「学生の学習意欲や自立的な学び」ということについてです。学生による授業評価アンケートを毎年取っている訳ですけれども、その中に次のような項目が載っています。もう先生たちはご存じのことですが、学部ですと、例えば3の「あなたの授業への取り組みについて」という小見出しがあって、その中に「8. 授業によく出席し積極的に取り組んだ」、「9. 授業内容をよく理解するために予習・復習（課題への対応や参考文献の読書等を含む）をした」、「10. 授業内容をよく理解するために教員に質問したり、他の学生と話し合ったりした」という問いがあります。

しばしば私が経験するのは「8. 授業によく出席する」、ここは良い評価、5段階で4・5がダークと埋まる。それによって学生が授業にしっかり出ているということが分かります。だけど一方で、この9・10のところですね。自分で行う学びというところは低いということが、よく経験しているところでは。

また大学院ですと、「あなたの授業への取り組みについて」で、「9. 授業に主体的・積極的に取り組んだ」、そして総合評価「10. この授業を総合的に評価すると良かったと思う」、こういうアンケートがあります。10はまあまあ良い評価で、つまり学生は一定程度の満足を得ているということが分かる。一方で9は低い。こういうようなことがしばしばあります。

これは、本学の学生についてよく言われることですが、学生は真面目に授業に出ている、けれども、本当に高等教育機関で学ぶ者としての主体的なあり方を有しているか、これは疑問である。こういうことが言われていて、この一端が、いま簡単に見たところですけども、このアンケートのミスマッチというよりは、マッチしているからこちらなのかもしれませんが、ここに表れているのではないかなと、日頃から思う訳です。

全ての学生がそうという訳ではないのですが、授業に出てともかく席を埋めるという努力というか、執念という点で言えば、色んな例が思い浮かぶことがある訳ですが、今回のこの特別公開授業に出た時に1つあったのは、ある学生がこの授業に必要なテキストあるいはプリントを忘れてきた。そして授業が始まって40分か45分ぐらいしたところで授業担当者に指名されて、「ここ読んで」という風に当てられた。そうすると「プリントを持っていないのでわかりません」と普通に言う。

これを見て、私たちは別に忘れ物チェックをして、それを責めようという意図がある訳では全くないにも関わらず、つまり隣の人に見せてもらって授業に参加していれば良いのに、それもしていない。とすると、ここまでの授業の半分、何をしていたんだろう。あるいはプリントはなくとも頭の中で高度な思考を巡らせていたのかもしれませんが、「何をしていたんだろう」と、やはり疑問に思う訳です。どこまで手厚く具体的な対応というか支援をしていかなければいけないのか、と疑問に思う。というか、やはり悩むということがあります。

そして、次の2のところですが、こうした学生を前にどう知的に挑発するか、ということです。この公開授業の後の研究会で、授業担当者の先生が「学生を挑発したいんだ」ということを述べられていて、それが非常に印象に残りました。私たちも全く授業の工夫を怠っている訳ではないんだと思っています。それは参加型とか対話型、あるいはグループ作業型、色んなものを取り入れたり、あるいは発表やプレゼンにつなげていくんだという風に、学生がただ聞くだけではなくて、自分からどんどん向かってくるような手立てをいくらかは施しているつもりです。

また、授業の中ではお薦めの本を紹介したり、参考文献、「面白い本があるよ」と、しかもそれは「すぐその図書館にありますよ」ということを常に述べていたりします。また関連する新聞記事として「こんなのが新聞にあったよね、この新聞も各紙図書館で読めますよ」と言ったりする。だけでも後に述べることと関わりますが、どうやらそんなに学生たちは図書館に足繁く運んでいる訳ではないようだ、ということも分かります。本とか新聞があまり学生の中にヒットしないならばと考えて、映画なんかも紹介することがあります。

でも実感としては、あまり挑発されていないようだということなのです。もっとも学生も、単に“勉強しない学生”と乱暴に一括りできる訳ではなくて、熱心な学生もいます。これがピッタリな例かは分かりませんが、例えば「夏休みに『二十四の瞳』を読んだ」、あるいは「小豆島に行ってきた」と言って、「映画も見た、本も読んだ」。その感想をメールで送ってくれるような、こういう嬉しい学生もいて、「ああ授業の延長線を戦ってくれているな」と思ったりします。

こういうような学生、多様な学生がいるという現状はもちろん掴んでいます。しかし先ほど述べたように、高等教育に学ぶ者としてのあり方というところには、総じてまだ検討の余地があるという訳で、例えばそれが“図書館の静かさ”に表れているのではないかとも言える訳です。私自身は本学の図書館はとても環境の整った優れた図書館の1つだと思います。そして私は図書館がとても好きですし、図書館に助けられている、そういう思いが非常に強いです。

そして、同じように図書館に愛着をもっている先生が「本学の図書館は静かだよ」という風に仰いました。この「静かだ」というのは、学生の節度とマナーが行き届いた結果、洗練された利用態度というものを言う訳ではなくて、利用者が少なく活気があまりない。そして良い意味での雑音に乏しい。こういう意味からの静けさだったと思います。“静かな図書館”というものは、もったいないと思う訳です。そしておそらくこの静かな図書館というものも、挑発されない学生の1つの現象なんだろうな、と考えたりします。

こういうことを考えていくと、1つ“知への背伸び”みたいなこと、これを上手く支援できればいいなという風に思ったりもします。例えば、これは授業から少し逸れますけれども、大学院生に修論指導などを行っている時に、新書本を先行研究に挙げてくる学生と出会うようになった、というか触れた、あるいは普通になってきているというような感覚が私の中にあります。

この研究指導、修論を書くという時に院生が新書本を専攻研究に挙げてくるということに、私はいくらか違和感を覚えるのですが、もちろん大いに新書本などを読んでもらえば良い訳ですが、その著者は新書本のテーマに関係するものとして、学術書だとかあるいは専門の論文を書いているはずなんですけれども、そこになかなか行き当たらない。

新書本を読んで、それを学術的な、自分が書く研究論文の先行研究に挙げてくるという。これはただ単に手順を知らないのか、そうした態度を有していないのか。まだそれは判断がつかないのですが、

こうした学生のあり方にやや違和感を覚えます。ですので、こうした学生には「この先生はきっと学術書も別のところで書いていて、たぶんそれは3000円以上する本だろうけども、読んでみるといいですよ」と諭すようなこともあります。先生方のコースではどうでしょうか？という風に思ったりします。

また授業の方に返っていきまると、私あるいは今回の研究授業を見させていただいた先生もそうなのですが、基本的な態度としては「できるだけ分かりやすく準備した親切な授業を提供しよう」というところが少なからずあります。しかし、この「分かりやすく親切な授業」というもの、これを提供すればするほど、ひよっとしたら、本当にひよっとしたらですけれども、学生は自分で考えたり勉強をしたりしなくなるのではないかと、という逆説的な思いも若干持ちます。

自分の学生時代を振り返ってみると、そんなに勉強した訳ではありませんけれども、例えば授業中、教授が展開する授業の中で詳しい説明もなく専門用語だとか抽象概念が出てきたりする。知らない研究者、初めて聞く学者の名前とか本の名前なんかもポンポン出てくる。しかも、それを知っていることを前提とするような授業の進行が為される。たぶん、これは親切な授業ではないという風に、今思っています。

ですので、当時ボーッととしていて終わってしまうこともあるのですが、必死にノートにメモをして、その本を後で買う。場合によっては古本屋さんで買う。そして読んだ。こういうような経験をしたことを微かですけれども思い出します。きっと授業としては不親切なのかもしれませんが、この授業者の放つ知性みたいなものに少しでも食い込もう、食い入ろうとするような背伸びをいくらかするような態度を、本当に少しかもしれないけれども持っていたかなと思います。

この「背伸びするようなあり方」というところが、学生の更なる主体的な学びというところにくらか繋がっていく、そんな思いを持っています。ですので“乱暴な授業”が学生を育てるのではないかと。こういう風に言うと、あくまでもこれは極論でしょうし、幻想だと思っただけけれども、分かりにくさとか難解さをそのまま持っている授業の建設的な意味なんていうものも、もっと考えられても良いのではないかと考えたりもします。これは本当に卑近な例を挙げながら簡単な話なんですけれども、1つ目の話題です。

2つ目は、「実践力とは何か」ということです。実践力の了解の仕方についてですけれども、「実践力とは何か」、実は私自身もまだ十分に定義づけられていない。そして、どうなのか？という風に悩む1人です。それは学生においても、その捉え方は様々なようです。学生による授業アンケートで、大学院のところで言うと「授業の内容について」の「3. 教師の実践力の育成につながる内容であったか」という問いがあります。

私は大学院で「人間形成文化史研究」、あるいは「近代教育文化史演習」という授業を担当しています。つまり、「教育の歴史を論じて、歴史研究を基盤とした教育学を示す」という授業になっていきます。ですので、すぐ明日から学校や教室で役立つ授業や内容を直接提供するものでは決してありません。ですので、教師の実践力の育成についての問いに対して、素直な学生は5段階評価で2をつけてくれます。これが学生における「実践力」に関する1つの態度だと思います。

一方で、この「教師の実践力の育成」というところで5や4をつけてくれる学生もいます。そうした学生は自由記述のところで「多角的な見方を学べた」とか、「過去の状況と今の状況の結びつきが理解できた」とか、「過去の蓄積の上に現在があるということが自覚できた」とか、こういうコメントを

述べて、積極的に私の歴史をベースとする授業に対して評価をしてくれたりもします。

つまり、これはごくごく簡単なものですが、実践力を直接的な意味、あるいは狭義で捉えるか広義で捉えるかということになってくるんだと思います。実践力を巡って、授業担当者である例えば私と学生の中で共通理解を得るということは、なかなか簡単ではないでしょうし、学生の中でもその理解は様々だということが、この一端からも分かります。「実践力」を定義づけるということの難しさでもあると思います。

こうした学生の中で色んな見方がある。あるいは授業者と学生の中で差がある。これは実践力を定義づける難しさの基本だと思うのですが、同時に今後構築しがいがある。あるいはそれゆえ可能性があるもの、とも見ていけるという風に思っています。そして、結局いまの段階で私が思うのは、実践力とは何か、あるいは専門性とは何か、正直に悩み続けるという態度だなという風に思っています。

教師は学校や教室で子どもに接して、指示して教えています。“絶えざる行為者”と言えます。何か常に動いています。でも、この単なる行為者と、実践力を有する者とは、たぶん違う概念だろうということになります。きっと「行為」と「実践」の間に、「省察」を挟んで考える、あるいは説明するということが1つのあり方なんだろうとは思いますが、単なる行為者と実践者、これを考えていくということが1つあるんだろうと。

ですので、繰り返しになってしまうのですが、「実践とは何か、専門とは何か、分からない」ということを正直に悩み続ける大学教師のあり方は、1つの健全なあり方なのではないだろうかという風に思っています。簡単ですが、以上です。

(司会) 梶井先生、ありがとうございました。梶井先生には、「分かりやすく親切な授業を提供すれば…」という、またそれももう1つの問題性だという逆説的な話をいただいて、それこそ挑発されたところなのですが、さて第2番目の発表者、社会系コースの町田先生、よろしくお願いします。

(社会系コース 准教授 町田 哲)

町田です。「人文・社会教育部のワークショップから考えること」を報告いたします。よろしくお願いします。

まず「I. 人文社会教育部での議論から」です。各コースでのワークショップにおける議論のまとめを事前に頂戴していますので、それをそのまま貼り付けたり、要約したものを、表で簡単に紹介させていただきます。

【国語コース】原卓志先生「コミュニケーションと言語・教育」(院・広領域コア科目)

授業テーマは、「コミュニケーションが成立する条件を考える」で、授業実践力の基礎として、自らのコミュニケーションを分析的に見る目を育てるものの必要性が授業意図として設定された。とくに80名強と人数が多い授業の中、多様な受講生に対し、いかに興味を持ちやすく、かつわかりやすい題材を設定するかという点で工夫された内容で、「愛の告白で相手にイエスと言ってもらうためにどうするかを、自身の経験を踏まえて考える」というものだった。

研究会では、強いて言えば「授業実践力と専門知識・資質との連関性」に関して話題となり、経験の対象化から授業実践力の基礎を育てるのか、条件を統制して分析しやすくするのか、目的によって課題の設定が異なってくる、といった点など、学習課題の設定の仕方についての意見交換がなされた。

【英語コース】 藪下克彦先生「英語学概論」(学部)

英語コースには英語学、英米文学、英語教育学の3分野があるが、学習内容としての3分野の関連性—例えば、音素や音節に関する英語学の知識が、(英語教育学との関連として)英語教授法としてのフォニックスの限界を補うこと、あるいは(英米文学との関連として)、シェイクスピア作品における脚韻法の理解を促すこと—を学生に気づかせることの意義を考える機会となった。また、将来教師として英語を教えるには、単に単語や文型・文法に関する知識だけではなく、その知識を深く解釈・鑑賞できる教養が求められることを再確認した。そのためには、我々が学生に教科専門の基礎・基本を教授していくことが重要なことを言うまでもないが、教科専門に対する興味・関心から自主的かつ知的に物事を追究する姿勢を養っていくことも大切であり、それがどのように実現できるかを今後考えていくことが求められる。

【現代教育課題総合コース】 谷村千絵・小西正雄・藤村裕一・田村和之各先生「教育実践フィールド研究」(院)

各グループが、鳴門市内の小学校と連携して進めている防災対策・教育について報告し、議論する内容。具体的には、1 防災伝承を生かした防災教育について、2 『学校防災管理マニュアル(暫定版)』と『地域とつなぐ防災教育』、3 『<生活防災>のすすめ』と『クロスロード・ゲーム』がテーマとしてあり、学生が現場のニーズを把握して、グループで協働して一つの授業を作り、議論することが目指されていた。またワークショップでは、「よい教師を育てる授業」について討議がなされ、①「良い教師」に求められる資質は、豊かな人間性ということ、②専門知識を通じて人間の心に繋がるものを獲得した者でなくてはならない。例えば災害時の教師のとるべき行動に示されているように、「実践力」は教師が自らの専門知識を獲得してゆく過程で磨き上げた人間としての生き方から生じるものである。ということが議論された。

【社会系コース】 青葉暢子先生「経済学概論」(学部)

社会におけるお金の循環に関するマクロな理解を目的とした授業について、様々な点が議論の俎上上がったが、中心となったのは、以下の2点である。まず、受講している学生のレディネスの保障についてである。経済学の理解を深めるためには、基礎的な数学を理解していることが前提となる。しかし、最近の学生は、高等学校終了段階における数学の理解度に差があることを感じる。この差をどのように縮め、学生の理解を深めていくか課題と言える。これは、今回取り上げた経済学の授業だけでなく、歴史学、地理学など他分野においても共通の課題といえる。

2つめは、社会系コース内における各分野のアプローチの違いが浮き彫りになった点である。このアプローチの違いを学生に意識させることによって、他の授業においてもより豊かな学力保障が展開しているのではないかという展望が示された。

非常にたいへん多岐に亘る議論が展開しているのですが、まず英語コースの方からみますと、英語学とか英米文学、英語教育学の3分野の関連性を学生に気付かせることの意義を考える機会となり、また知識を深く解釈し得る文化・教養の重要性が提起されています。また、そのためにも学生が自ら自主的かつ知的に探究する姿勢を養うことの意義が確認されました。

また総合コースでは、防災教育のあり方を考える中で、良き教師の実践力とは教師が自らの専門知

識を獲得していく過程で、磨き上げた人間としての生き方から生じるものである、という点が提起されています。

この2つのコースを見ますと、いずれも専門知識を単に獲得すれば良いのではなくて、その獲得過程の中で得られる生き方なり、解釈する教養こそが教師・人間として非常に重要だという点が共有されており、「なるほど!」と私自身も思いました。

また、そういう力の獲得のために授業上でどういう工夫や条件が必要なのか、という点も議論されています。国語コースでは、自らのコミュニケーションを分析的に見ることの必要性を捉えることの重要性、あるいはその学習課題の設定の仕方について議論が為されました。社会系コースでは、経済学の法則理解の上で必要な基礎的な数学の力のレディネス準備の保証や、各学問のアプローチの違いを意識させることによって、学生の力量の向上に資することができるのではないか、という点が展望されています。

これら各コースでの議論からは、いずれも非常に重要な論点でありかつ多岐にわたっております。ですから、私の方でこれ以上まとめることが難しかったというのが正直なところですが。そこで後半では、「Ⅱ. 日頃の講義の中で考えること」を紹介して報告に代えたいと思います。内容としては、学生の意識の問題ですとか、授業力と専門的知識との関連に関わることになろうかと思えます。私は授業が下手だということは重々自覚しているのですが、下手は下手なりにということで紹介させていただきます。

ここで紹介したのは、火曜日の1限目後期に開講しています『初等・中等教科教育実践Ⅱ』（学部2年生対象）です。全体は梅津先生がリードしてくださっている中で、日本史の私が4回、それから現職の先生お2人による実践各2回、それから残りのすべてを社会科教育学の梅津先生という形でリレーしながらやっております。それで、私が4回の中で教えた内容を、梅津先生ご担当の授業づくりだとか模擬授業のご指導の中でつないでいただいで、深めていただいております。

私の担当部分では、題材としては「巨大城下町江戸」というものを素材に、近世社会の特徴を捉えるというところに、かなり私としては絞った形で考えています。吉田伸之さんの研究（吉田『成熟する江戸』〈日本の歴史17〉講談社、2002年）を踏まえた授業づくりをしています。授業の中身としては2つありまして、1つの柱は、ここに挙げました江戸の絵巻物、『熙代勝覧』（19世紀初頭作成・日本橋周辺700mを描く）という絵巻物をまず学生に1時間目に見せています。

ここで描かれているのは、様々な身分の存在があります。刀を差している人、職人風情の人、あるいは願人坊主という乞食に準ずるような人がいる。非常に多様な身分の人が、これは日本橋周辺、江戸のメインストリートの中で存在しているという点に、まず気付いてもらいます。

また、建物を見ても、だいたいみんな2階建てでかなり均整の取れた町屋敷が展開すること、それから一つ一つの建物の敷地が「町屋敷」であって、その集合によって「町（ちょう）」というものが成り立っているということをイメージしてもらいます。ここに木戸がありますが、これは町と町の境目です。これらから、町という共同組織が都市の基盤にあるのだという理解を得たいわけです。

それから、ここには様々な「売りの形態」というものがありまして、通りに面した「表店（おもてだな）」と呼ばれる存在とか、あるいは天秤棒を担いで物売っているような人、「大店（おおだな）」という質的にも量的にも非常に巨大な店舗、あるいは、道端で通りに面した店舗（表店）とは全く違う品物売っている形態などがみえます。こうした多様な売りの形態、そういうところから商業流通

の展開というものを見ることもできるんだ、という点などを示唆しています。

こうして、1回目の授業では、絵巻物『熙代勝覧』を紹介しながら、1つの絵画資料には教科書横断的な多様な側面が含まれているんだと、だからこそ、そこから何を読み取るのかというのが重要なんだ、ということをお伝えたいと思っています。

併せて学生には、この画像を解説した吉田伸之他編『大江戸日本橋絵巻』（講談社）という本がありますので、それを紹介して、最初にレポートの課題を出します。4回目の授業時に受講生による「レポート報告会」をしまして、それぞれ学生がこの絵巻物のどこに注目をするのか、なぜそれに注目したのか、もし自分が授業ですとしたり、その題材を通して何を生徒に伝えるのか、というようなレポート報告会をして、色んな視点をお互いに共有し合うということをやっています。以上が柱の1つです。

もう1つの柱としては、同じ地域のことを描いた奥村政信「駿河町越後屋呉服店大浮絵」をみます。これは浮世絵の源流の一つで、大店三井越後屋の様子を描いたもので、教科書や資料集にもよく取り上げられているものです。その際しばしば注目されているのは、「現金掛け値なし」という貼紙の記載で、ここから「三井の新商法」と一般的に（教科書でも）言われているのですが、この授業では、むしろ、なぜそれが新商法なのかということをお解き明かす形で講義をしています。

例えば、丁稚とその後ろの方にいる手代が二人一組でお客さんを相手にしながら現金売りをしている。その様子とは、実は従来、表店と呼ばれる通りに面したところでは、小売りをしてはいけなかったのが、店前で行っていた小売り（振売）の機能を三井が取り込むことで生まれた様子であったのだ、それが新商売の中身なのだということです。あるいはこの絵を切り口にしながら、この大店というのがどういう構造なのかをみるわけです。江戸では、この三井越後屋は①間口数軒以上のたくさんの店舗を構えているんですが、②いずれも敷地全体が店舗空間と台所空間に分かれていて、③奉公人600名や、出入りの商人・職人も620名がいるけれども、それぞれ店舗と台所に二重化して存在しているということ、④“抱え屋敷”という町屋敷を他町も含めてたくさん持っていて、その「裏店（うらだな）」には一般の民衆が裏長屋で助け合いながら暮らしている。

こうした点を説明しながら、大店というのは江戸の中での1つの社会的権力としての側面を持っていて、一方でその背後に生きていくためにはこの大店と関わらざるを得ない膨大な民衆がいたんだ、そういうことを理解させたいなと思っています。

それで3回目の授業の時は、特に「駿河町越後屋呉服店大浮絵」の中心で、手代が睨みつけている相手は誰なんだということで、その読み解きから、これは願人坊主と呼ばれる一番底辺の乞食層が、実は乞食層でありながら彼らは京都の鞍馬寺を本山とする仲間集団を形成して、そういう集団というものがある近世社会では非常に重要な要素だったんだということ、あるいは彼らは大店が持っている町屋敷の裏店に居住しているとか、飢饉ともなればお金や銭を欲しがるとか、運動する下層民衆であることを示していきます。

最後に、下層民衆の典型であるという形で、北斎とか小林一茶なんかも、この願人坊主ではないもののこれに準ずる裏店居住の下層民衆なのだということも示唆しながら、大店とこういう民衆世界とのせめぎ合いというものが江戸の中であった。そういう社会矛盾とか社会構造という、そういうところにも気付かせたいなということで授業を行っています。

以上4回の授業の中で、私自身が意図しようとしていることは2つあります。

1つは絵画資料というものの扱いです。いずれも教科書や資料集に必ず出てくる絵で、具体的な素材から時代の特徴を捉えるという、そういう帰納法的な発想なんだということをまず強調した上で、絵画資料というのは小・中の現場でも生徒たちにはかなりインパクトがあるものである。だからこそ教師が何をどんな目的で選択するのが重要な課題なんだ、ということを実感してもらうようにしています。

その一方で、絵画資料からだけでは、その社会の特徴がすぐ分かる訳ではなくて、あくまで入口です。仮説の手段に過ぎない訳ですので、他の文字資料なんかも突き合わせることで、その背後にある社会関係が初めて分かるのだということ、そうした環境の中で人々は生活文化を培ってきたのだということを実感しながら理解してもらうことを目指しています。

2つ目としては、教科の内容というのは、何か固定的な「こと」とか「モノ」があるのではなくて、教師自身が自ら探究・選択した上で初めて授業に活かすことができるのだ、ということを実感してもらいたいと思っています。

近年、学生の言葉では「授業をできるためには、自分は引き出しを増やしたい」とか、「ネタをたくさん持ちたい」と、そういう声をよく聞きます。特に実習の後にそうした意識を持つ学生が多いようですが、勉強が必要だという意識があるのは非常に良いことだと思うのですが、ただ“引き出し”とか“ネタ”ということでは、やはり誤解してしまう面があるのではないかと。一つには日本史とか法学とか、いわゆる「教科専門」の授業さえ受けていけば教えられるというような意識、実際にはそんなに簡単にその学問をすぐマスターできるというようなものではありません。そういう1つの誤解があるのではないかと。

今一つの原因として、その背景として「何か教えるべきこと」というのが、言い方が悪いのですが一まるで「冷凍食品」のようにあって、それをチンして上手く盛り付ければ授業で教えられる、と考える傾向がどうもあるのではないかと考えてなりません。そうではなくて、「歴史」という分野に関して言えば、歴史的事実はどういう風にして分かるのか、事実の連関から歴史の解釈がどのようにして成り立っているのか、そういったことを、未来の教師が自ら学び、かつこれらの点を探究する方法論を学ぶことによって、歴史の魅力を伝えていくその原動力にしてほしい、と考えるわけです。

食事に例えれば、良い食材（資料・教材）を見極めて、料理方法を考えて、献立（授業構成）を考えて、生徒の口に合う美味しい栄養のある料理を、1人の教師が首尾一貫してできるようになること。この授業が学生にとってそうした点の重要性を知る機会となって、学生の意欲を引き出せたらいいなと思っています。

なお、以上の点はコア科目だけではなくて、普段の専門科目の特論などの授業でも基本的には同様です。こうした点を歴史学の教員同士で日常的に議論して、目的意識を共有しています。

以上で、報告に代えたいと思います。

(司会) 町田先生、ありがとうございました。それでは3番目に、生活・健康系コースの宮本先生、よろしく申し上げます。

(生活・健康系コース 准教授 宮本 賢治)

技術・工業・情報コースから、宮本が「ものづくりのための良い教師を育てる授業とは」という題

目で、先日行われました特別公開授業の概要と授業研究会・FD ワークショップで討議された際に出ましたご意見について、ご報告させていただきます。

まず特別公開授業ですが、学部3年生を主対象者とした『木材および木質材料学』という授業が行われました。この授業の趣旨と目的ですが、本学の教員養成ではものづくりの技術の活用能力を実際の教育活動に活かす資質・能力を育成することを重要な目標として掲げているのですが、本講義では「木材の構造、理化学的・機械的性質を理解し、それらを基礎として身の回りにある木質系材料の構造・性質、製造方法および用途について学習する。更に生物資源としての木材の特徴、木の文化についても学習する」とあります。

それで、公開授業時の内容ですが、木材の持つ基本的な性質と、「中学技術」というものづくり教育との橋渡しの役割を為しております。講義は樹木の成長様式から始まって、成長の結果としての細胞組織構造を電子顕微鏡にて撮影した写真を見せ、その構造に基づいて例えば“のこぎり曳き”といったように木材がどのように加工されるべきか、中学技術で扱われている材料加工の背景的・基礎的な知識となる内容について、非常に分かりやすく且つ興味深く講義されております。

次に、その後に行われました「授業研究会・FD ワークショップ」では、教育内容に関する討議が行われました。この討議では様々な意見が出たのですが、一言でまとめると学生の持つ技術科教育というか、ものづくり教育への認識の不十分さ、甘さが指摘されています。それらを具体的に述べると、以下で述べるように5つの点にまとめることができます。

まず1つ目ですが、中学校の学習指導要領において、技術・家庭科の目標は「生活に必要な基礎的・基本的な知識および技術の習得を通して、生活と技術との関わりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる」と明記されております。

これを意識して、日常生活の身の回りにあるものや自然現象と、教科専門科目との関連について言及する学生は非常に多いのですが、その一方でこれらの日常生活の身の回りにあるものや自然現象に対して、興味・好奇心が見られない点が問題であるということが指摘されています。その結果、背景や基礎知識の欠如や体験不足により、大学の講義においても実際に学生の目の前で実験を試みたり、あと実物を見せても驚いたり感動するといったような反応がほとんど見られない、という点が指摘されております。

2番目に、日常生活で使われている機械や電気機器などの構造や仕組み・原理についての興味・関心が薄くて、ものを製作する側というよりは、ものを使う側の立場に関心の重きが置かれている状況にあるのではないかと、という意見もありました。このことは、ものづくり教育が衰退する方向にあるのではないかと懸念されます。

3番目としては、以上述べた事項を踏まえて、現場での解決能力・応用力の低下や教科書・指導書に書かれているとおりにしか教えられない。背景的知識の不足により教科書に書かれているから教えるんだという、授業のマニュアル化も指摘されております。

更に、ものづくり教育では安全教育、すなわち実習室の保全や工具機器の安全な使い方についても大学で十分に教えないと、学校現場での事故や火災、または機械を使った際に指を切断してしまうとか感電死してしまうといったような生命の危機にもつながります。本学の掲げる「教育実践力の育成」が極めて危機的な状況にあると考えられるのではないかと、という意見がありました。

4つ目としては、昨年度のFD推進事業において、共通の課題の1つとして学生の授業に対する意

欲・モチベーションについて、例えばコア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識の低い点が指摘されております。その一方で、学生の意識が教科専門科目よりも、むしろ教採突破の方に優先度の高い点が今回指摘されました。

本学は2年連続教員就職率が日本一であり、今年に限っても本コースでは多数の教採合格者の報告を受けて非常に喜ばしい傾向にあるのですが、教採突破の方に優先度が高く、本来あるべき大学の教養専門教育が衰退して、就職のための専門学校化しつつある点が懸念されております。

また、近年は教採合格者については卒業研究で何もしなくても卒業できるという、間違った意識を持った学生が少なからず存在するという点も、専攻コースを越えて指摘されており、大学として非常に憂慮すべき事態にあるのではないかと、というご指摘もありました。

最後になりますが、近年の理数離れの反映として考えられるのですが、教科専門科目の授業の中で、「〇〇の分野は嫌いだ」とか、または「高校の時は文化系だったので、こんなことはできません」といったように、将来教師となる上での資質や姿勢、心掛けとして疑われるような不適切な意見や考えの学生が、少なからず見られる傾向にあるという意見もありました。

今回の「授業研究会・FDワークショップ」で出ました意見は、「ものづくり教育」という側面からの意見ですが、この後の全体討議での切り口の1つとなれば幸いと存じます。発表は以上です。どうもありがとうございました。

(司会) 宮本先生、ありがとうございました。それでは4番目、最後になりますが芸術系コースの内藤先生、よろしくお願ひします。

(芸術系コース 准教授 内藤 隆)

美術の内藤です。「教科教育と教科専門との関係について」ということでお話させていただきますが、内容的には美術コースで行ったFD討議の昨年と今年のミックス、今年は幸い先週の午前中にできましたので、その報告のような形で大まかにいくつかの項目でまとめさせていただきたいと思ひます。

まず、教科教育と教科専門の教員の関係性についてですが、美術コースでは大変良好です。附属校の研究会への参加や発言などを見ても、非常に順調で円滑に進んでいると思ひます。それから図工やコア科目などで授業の組立、それからその内容などについてお互いに取り入れている態度もあって、それが柔軟だと思ひます。

模擬授業とか対話型鑑賞などについても、柔軟に取り入れて応用させていただいています。それから授業外の美術教育活動というのをやっているのですが、個人的にはN * CAPなのですが、その活動や研究発表などでも既に共同で行っているものもありますので、本当にお互いの良い部分、一緒に活動させていただいて良い部分を吸収させていただくと同時に、参加学生たちにもそういうことを体験させることができていると思ひます。

次に2つ目ですが、コア科目ですね。『初等・中等教科教育実践』などが自分たちに求めているものは何か、というような理解ですけれども、これについては「仲間との対話」だという風に理解できるのではないかと、という話がありました。私などの専門にとって、当初この科目というのは専門の内容を現場にフィードバックさせることが目的という感覚でしたが、これは鈴木先生のご意見だったのですが、実技制作や鑑賞をそのまま還元させるというのが実は結構難しいというお話でした。

これについては、本当に自分たちが日常やっている制作などをそのまま簡単に取り入れるのは非常に難しいということで、当初は相当苦しみました。それで教科専門教員は自分の専門と照らし合わせて、限界とにらめっこしながら、ある程度の工夫をしていくことができつつあります。完全ということではもちろんありません。ただ、順調にそれができつつあります。理解して楽しんでさえいるのではないかと思います。具体的には、専門内容の基礎・基本を中軸にした授業を組み立てて実施し、結果の省察を繰り返すという経験が、私たちにもできているのではないかと思います。

さて、この教科教育と教科専門の関係の中で、何が大切なのか。コア授業などを通して何が大切か、何が重要かということなのですが、まず一番大きいのはやはりバランスだと思います。子どもたちの成長に合わせて、どのような内容をセットしていくのか。

先ほど町田先生のお話にもありましたが、(教育は)内容を精査して、どういう風に、オブラートに包んで上手く投げ入れて、騙してでも食べたら「おお、やった!」と思う(達成感を感じる)訳ですけども、そういうことを常々考えて、見直しては繰り返すことができます。それで既にあるアイデア、教科書などに載っているアイデアからも、それを参考にしながらどのように工夫していくか、ということのをいつも考えています。

それから重要なところとしては、各自の持ち味をやはり磨いていかなければいけないということがあります。これは昨年度(の研究会で)退職された先生が「やっぱり一人ひとりが良い作品を作っていかなきゃいけないじゃないか」という風に仰っていたことなのですが、専門教員というと“タコツポ的”という風な感じもしないではないのですけれども、もちろんこの大学が、教員養成大学の所属であるということを感じながらも、それぞれの研究を維持・向上させないといけないと私は思います。

それで、各自のおいしい要素を教育に取り込んで行くべきです。そうしないとおいしい要素を教育に取り込めなくなってしまう。マヒしてしまう。また、間接的なターゲットは児童・生徒に対する教育な訳ですけども、子どもに対する教育なのですが、その前に目の前にいる大学生に専門的な内容を通して、自然や社会の真理を探らせる糸口をつかませないといけないという風に思います。

例えば、自分が授業を教わる時に、先生がいる訳ですけども、その先生が黒板に書いて教科書の内容をそのままただ棒読みするという先生よりは、「これ、楽しいだろ?」みたいな、自分が凄く楽しんで学んでいるというような、そういう先生に私は教わりたい。そういう子(学生達)を育てたい。自分の子どもにも、そういう風な先生にラッキーだったら当たってほしいという風に思いますので、そうあるべきだと思っています。この時間確保などのことに関しても、バランスが大切だと思います。

一方、教科教員の教員については、現場を伝えてもらうということですね。それから子どもの側に立った、子どもが知識を受け取る気持ちを常に再認識して、伝えられることの意義、それから将来その知識を飲み込んだ子どもたちがどうなっていくのかということを考えて、また更に専門とこれを共有していくという大きな仕事があります。現場で起こる色々なケースを専門教員に紹介していく役目も出てくるので、やはり各教員に時間と余裕が必要になると思います。

それから、こんな状況は避けた方が良いという、「実際の授業の中でもこんな状況があったら避けようね」という話になったのですが、専門教員が現場を神聖視し過ぎたりとか、バリアを感じたりとか、そういうことはいけないということです。個人的意見ですけども、前にこういう方を見たことがあります。

教育学系の集まりだったのですが、(教育系大学の専門系の先生が)現場の話になると「あっ、それは僕わかりませんから」と言うのです。私は凄く驚きました。その方は教育系大学の先生だったにも関わらずそのように発言されたので、自分は「えっ、何言っているんだろう」という風に凄く驚いたのですけれども、幸い私たちの仲間にはいないのですけれども、「僕は分からないから」というのは禁句だと思います。

それから、似たようなことでは“お見合い”，授業の中で「教科専門の彼がやっているだろうから…」，だから遠慮してやらない。それから「教科教育でもやっているはずだから…」という風に思い込んでやらない。そういう色々な意味で「技法・技能の基礎力，現場での題材理解の面などでも，しばしば専門と教科教育は重複する。けれどもそれは怖がってはいけない」という風な話も出ています。

さて、今までが大きな枠で「教科教育と教科専門の関係について」，お話をさせていただいたのですが，もう1つのテーマ「教科関連科目には熱心だけれども専門に力を抜く学生がいるか？」という，モチベーションに落差のある学生がいるかということに関してですが，このことについては幸い美術に関しては，現在のところ特段見当たる状況はないということです。ハードな課題を出しても，とりあえずはついてきてくれますし，もちろん自分の就職先である(教職という)就職目標，出口の目標についても非常に一生懸命勉強してくれると感じています。

では，次に「その他の課題」です。これは，先ほども宮本先生のお話に出たのですが，本学の特性でもあるけれども，教採対策に特化した専門学校的な一面があって，最近は特にその面を押し出している。押し出さざるを得ないのかもしれないのですが，学生の出口対策としては大変重要な措置であると思います。本当に学生がまずどうしてくれるか，というのは最大の課題ですので。ただし，出た学生が“傾向と対策”ばかりに陥らないようにするのも注意が必要ということです。

次です。国家の金欠がいま続いています。それで人員削減というのがどんどん進んで，その補充がなかなかできないというような状況があって，教員の仕事が増えすぎているように思います。私だけでしょうか。特に美術は昨年度末に一気に3名の先生が退職されて，その影響が凄く強くて，授業と事務を回すだけで青息吐息です。具体的に困るところはまず研究が，研究どころか肝心の授業改善とか学生に対応する時間がなくなっている。これを何とかできれば嬉しいのですが，ということです。

何かガラガラボンじゃないですけど，一気に無駄な仕事を削り，大切な仕事を大切な順に並べ直せないものと常に思います。今の多忙さの実感としてちょっと心配なのが，(教員は)研究実績を積みなければなりません，そのための研究成果を積む時間が本当にみんなにあるのかな，というのがちょっと心配です。

次です。時間がないということに関してですが，学生に対しても仕事内容というか授業内容というか「あれやれ，これやれ」というのが凄く多いように感じられます。自分の授業の課題のキツさ，特に1年生の課題が結構キツイ時があるのですが，それをちょっと反省せざるを得ないなとも思うのですが，この「授業編成」などに関しても一旦全てを整理して，大切なものから並べ直しができるのではないかなと思います。特に，これは個人的な意見ですが，就職対策については授業に組み込んでしまふべきだと私は思います。

それから4つ目ですね。これは山木先生が出しておられたのですが，教員の希望として，これはやはり先ほど出た話と似ているのですが，学生たちに主体的な好奇，知的好奇心を獲得してほしいと，

これを仰った時に山木先生は本当に“喉から手が出る”というような顔をされていたのですが、これは私も思いますし、おそらく他の先生方も皆が思っていると思います。

これについても、やはり学生の時間を確保すれば良いという訳ではないのかもしれないですが、色々これから方法を考えていかなければいけない。ただ、できる改善は具体的に進めていかないといけないという風に思います。もしかすると具体的な大きなチャンスがあるとすれば、それが6年制への編成替えが本決まりになったら、改善のチャンスなのかなという風に思っています。以上です。

(司会) 内藤先生、ありがとうございました。それでは4名の先生の発表が終わりました。さて、タイムスケジュールは4時5分まで「質疑応答・全体討議」を行いまして、4時5分から5分間で西園先生にまとめ、閉会の挨拶をお願いしたいと思いますので、残り25分間ディスカッションを行いたと思います。各専攻コース、まさに多様でありまして、そういう多様性の中から今回「共通課題」ということで2点あった訳です。

1つ目が「意欲・モチベーションをどう高めていくか」、2つ目が「教科教育と教科専門の関係」、また「実践力と専門知識との連関性」という問題、それに加えて「その他」ということでまた何かありましたら、そういう主要テーマの下でディスカッションを進めていきたいと思えます。

まず、発表者の方に何か確かめておきたいようなことがありましたら、そういうところを切り口に質疑応答から始めていきたいと思えますが、いかがでしょうか。何か確かめておきたいことがあればお願いします。

(廣瀬) 宮本先生だったと思うのですが、技術に対するものづくりの興味・関心がないということで、将来的にもものづくりの気持ちとか技術が低下していくのではないかと仰ったのですが、これは由々しき問題だと思えますけれども、これは過去と比べてそういう風に低下してきているのでしょうか？というか、最近の学生を見て絶対評価をしたのかということについて教えてください。

それと、梶井先生と内藤先生が仰ったことは非常に哲学的というか形而上的な考えとか、真理でありますとか、教育論とは何かとかといった内容に興味を持つような学生を育てたいということだと思えますが、そういうことに興味を持つというのは、ある程度の知性というんでしょうかね。そういうことが必要だと思うのですけれども。

どの分野に関心を持つかということは、学生の偏差値では測れないと思えますけれども、全員の学生にそういうことを期待するのか、10人のうち1人でも2人でもそういうことがあればいいと思えているのか、あるいはまた、現実には10人が10人ともそうではないのか、というようなことについて教えてください。

(宮本) では、まずは宮本からですけれども、特にデータを取ったという訳ではなくて、むしろ各教員が長年見てきた感覚的なところもあるのですが、やはり最近だと例えば昔だったら自分たちの経験から言うと、ラジオなんてパッと開けると本当に部品が見えたりとかして、見様見真似で作ったことがあるという先生方ですが、私らの年代では結構おられるんですね。

ところが、今の学生って本当にそんなことやったことないというか、本当になくて授業でやると「ほんまに初めて」みたいな感じがあるんですよ。やはりその1つに、最近の製品はかなり技術が難しく

なっていて開けて中を見ても分からないし、メーカー側の方もなるべく消費者には中身をブラックボックス化しているということがあって、そういうような本当に身近にあるものだという風に実感できないところがあるのではないのかなというのが、先日に出た共通した認識です。

その一方で、最近のデジタル機器というのは結構学生も使い慣れていて、そういうので動画を使って何かを作るといふ、ある意味作るのかもしれないのですが、私も先ほどの発表では多少言葉足らずのところもあったのですが、同じものを作るのでも何か我々といふか古い世代と今の若い人の世代とでは少し認識が違うのかなといふのも、実は意見としては出ております。

(司会) はい。では梶井先生、お願いします。

(梶井) 私の言いました、あるいは先生にご指摘いただきました形而上学的な内容だとか真理と向き合う態度ということなんですが、先生が非常に面白い問いかけをしてくださったのでそれに乗ってなんですけれども、こうしたものと向き合う体力みたいなものといふのは、ぜひ全員にいくらかでも持ってもらいたいと思うものです。

将来の教師として細やかなことに対応していく、といふのはもちろんあるのですが、その基盤といふかそういうところに、やはり自分なりの価値や信念といふものを持った教師の方が結局は信頼されるだろうという思いがあるので、いくらかその体力を持ってもらう、という点に関しては全員に望むものです。ただ、この真理だとか大きな知性と向き合っていくのが大好きで、それに執着したい。それを自分の大きな趣味にしたいといふ方は10人に1人で良いかもしれませんが、“広く”といふところではもっといきたい。

それを聞いて思い出すのが、以前、地方の教育学会だったと思いますが、教育委員会の方が近年の若い教師、例えば私たちが送り出す若い教師に対して「白身の教師と赤身の教師がある」といふことを言われていて、これは魚の白身と赤身で、つまり白身といふところは器用に色んなことをこなしていったら、トラブルも起こさないし上手く集団の中にもフィットしてやっていってくれるが、淡泊。

それはそれでとてもいいんだけど、赤身の教師がいない。といふのは、つまりドーンと何か大きなものを持っていて、時には教師ともぶつかるし、子どもともぶつかるけれども、何か存在感があるといふような、濃さ。これもいくらかシンボリックな言い方で“白身・赤身”だった訳ですけど、そういうことを思いながら見ていくと、赤身の教師に全員がなったら確かに大変だろうなと思ったり、といふところで私も悩みながらといふことなのですが、ひとまず返答といふ風にしたいと思います。

(司会) 廣瀬先生、何か、よろしいですか。

(廣瀬) 質問に対しては十分に答えていただいたと思います。

(司会) はい、ありがとうございます。では、内藤先生からもお願いします。

(内藤) やはり学生の知識を釣り上げるということなのですけども、私ももちろん全員です。釣り上げられるんだったら全員つり上げたい。ただ、何人かが先に釣り上がるんだったら、そこから釣り上

がって、その子たちが連携を組んで、またその友達を釣り上げるというように引っ張り上げてくれるのが一番、一番というか私のイメージでは割りと良い状況だと思います。

それで、どんな釣り糸を垂れるかということなのですが、例えばN * CAPとかだと、具体的には私の場合だと宗教画を子どもたちに見せるにはどうしたら良いかとか、そういう（テーマを与える）ことでも釣り糸を垂れたりするのですが、FD研修会の話し合いでは、実は栗原先生から「授業が終わったあと掃除をさせるという時間がとれない」という話が出ていた。

それで、何でその釣り糸が引っかかるか分からないのですが、掃除といたら本当に教える項目からは外れるかもしれないのですが、明日の作業への継続の間に立つもので、それをきちんと済ませておかないと実は結構大変なことになってしまう。そういうことで、どこにその釣り糸が作れるか分からないのですが、とにかく色々な方法を使って、色々な方法を検討していきたいという風には思っています。それは私だけではなくて、みんな思っているはずですよ。

(司会) はい。白身・赤身、釣りとか鳴門らしい話題になってきましたが、色んな点から皆さん色々質問やご意見もどうぞ、いかがでしょうか。

(藪下) 英語の藪下です。梶井先生だけでなく他の先生方も指摘されていることですが、授業には出るけど積極的に取り組んだという点は低いという、ずっと鳴門教育大学には傾向があるということなのですが、まず私自身を感じるのとは制度的な問題もありますけど、学生が取っている授業がやはり多すぎるのかな、ということがあります。これは制度的な問題なので、どうしようもないのですが、

それと関連して、価値観というんですかね。鳴門教育大学の多くの学生は、できるだけ多くの免許を取ることに何か価値を見出しているということを感じるのですが、私自身も教育学部の出身ですが、あまり多くの免許を取るということに価値を置いていなかったと思います。その時代というのもあると思うのですが、そこら辺の根本的な価値観が少し違うのかなという気がしています。

それで、とにかくできるだけ多くの免許を取ろうとしているので、授業も多くなりますし、その中で授業以外で自主学習というのが少なくなるというのは当然のことではないかなと思うのですが、そこら辺の問題があるということと、あとは「知的な好奇心」という意味では、やはり先ほど言ったことと関連していますが、自分自身で授業以外のことで何か読んだりとか考えたりする時間がないと、そういうものは育たないような気がするんですね。

ですから、今も言いましたけれども制度的な問題で、授業の数があまりにも多いというのが根本的にあるのかなと思います。だけど授業を少なくしたら知的な好奇心が出るかどうかというのはちょっと疑問です。クラブとかアルバイトが中心になっている現状もあるみたいですね。

それと、授業外で勉強させるためには、しっかりした課題を出さないといけないと思うのですが、そのしっかりした課題を出すと、言いにくいですけど採点とかそういうものに凄い時間とか労力を取られてしまうという心配があって出せないのかなと、私も含めてそういうことがあると思います。

アメリカとかでは、TAが宿題とかの採点をしますけれども、鳴門教育大学にもTAという制度はあるんですが、そういう宿題の採点とかに使えるような形にはなっていないということがあって、名前だけは同じなんですけど中身が違うという問題があると思います。気付いたところを、そのまま言ってみました。

(司会) はい。学生のやる気・モチベーションに関わる問題だと思います。価値観とか知的好奇心、しっかりした課題を出すところらもそれなりに関わるということ、そういうご意見でしたが、これは誰にどうというか、発表者の方で何か刺激されてこれに答えたいという方がおられれば、いかがでしょうか。何かありましたら、よろしいですか。そういう意見を受けて、ではどうぞ。

(武田) 理科の武田です。今の藪下先生のお話とも関係するので、ちょっとお話させていただきたいと思います。この大学に私が来てもう20年ぐらいになるんですけども、その頃からずっと思っていたことなのですが、教員になるという目的、これは大学に入る時に、当時からそうでしたけれども目的を持たずに大学に行くのが問題であるというようなことが社会的には大きく言われていて、そういう意味では目的をきちんと持って学生が来ている大学ということになるのでしょうか、一方で、教員になるという目的があまりに具体的すぎて、それ以外のことに興味を示す余裕を持たなくなっているという側面があるのではないかなと感じていました。そういう意味で、「知的好奇心」という話が先ほどありましたけれども、知的好奇心を持つためにはそういう余裕というのは当然必要なのではないかな。

そうしますと、更にこの大学の場合には教育実践というものを前面に押し出していきますと、これは基本的には知的好奇心を満たすということよりは、職業訓練に近い内容のことをやっているということになりますので、それが逆に言うとそういう知的好奇心を持つような学生の性向といいますかね、そういうものと齟齬をきたしてしまうような、そういう面があるのではないかなとおもうわけです。

先ほど梶井先生の話の中で、「高等教育機関で学ぶ者としてのあり方」というような話がありました。そこに帰着されていかないのかなと、つまり教員養成系であるがゆえの、ある意味使命として教育実践みたいなことというのを前面に押し出さなければいけないという、それは否定できないかもしれないのですが、逆に言うとそういうものがモチベーションを削いでいるという可能性を私自身も感じるし、実は理科のワークショップの中ではそういうことを仰る方もおられました。これはどこまで本当か分からないですけども、一応ずっと感じてきたことです。

(司会) はい。20年間ずっと感じてきたことを言っていたら、ありがとうございます。教員養成という目的が明確なだけに職業訓練的になって、そのことでそういう知的好奇心、拡散的な思考というのが制限されてしまっている。そういう両面というか“諸刃の剣”のようなところがあるというお話でした。

時間もあまりないんです。あと7分ぐらいなのですが、何か結論が出るという会でもないんですけども、色んなキーワードがたくさん出まして、今後につながるご意見をありがとうございます。あとまだ少しありますので、いかがでしょうか。

(山木) 美術コースの山木です。梶井先生のお話を伺っていて、「なるほどな」と思いました。しかし、一般的な高校生の段階から学部へ、学部から院へ進学する者の立場から考えると、「新書」を手がかりに学習をつなげていく、基礎的な学問の方法論などを学ぶことも有効なのではないかと、逆の立場から考えていました。そういう観点から更に少し意見と紹介を申し上げたいと思うのですけれども。

まず最初に、基礎力をどういう風に身に付けるかというところでいえば、例えば梶井先生のお話自

体がもの凄く明快で、こんなに分かりやすく明快にお話していただける先生がたくさん鳴門教育大学には、おられるのだろうな、自分も学ばなくてはいけないなと思いました。そういう模範的なお話についてさえ、学生の立場から聞いていると意外と「広義と狭義」などの言葉は意味を掴みにくい。例えば今の学生で広義と狭義と聞いた時に、対語のまとめりとして、果たしてイメージを持てるのかなと考えてみたのです。先ほどのお話は、学生に対する話ではなかった訳ですけども、どうなんだろうな？と思った訳です。

つまり、高校までの学力として、かなりのものがついているとはいえ、やはり大学での講義形式の授業の中での言葉とか熟語に、どこまで学部生がついていっているのかなと疑問に思うわけです。

おそらく、かなり多くの先生方の反対が予想されるのですが、私は授業前に電子辞書の持ち込みを奨励しています。「分からない言葉があったらすぐに、その場で辞書を引く」という状況をよしとしているんですね。持っている人、持っていない人の格差という問題はあるのですが、分からないことがあったらすぐ引いてみよう、理解してみようと呼んでいます。

それからもう1つは、他のことに流用しない、ネットに公開したり悪用したりしてはいけないよという前提で、ICレコーダーで授業を録音することも許可しています。なぜかというと、やはりその場限りの言葉を聞き損ねた場合もあるでしょうし、何回か聞くうちに見えてくるものもあるでしょう。ICレコーダーでもう一度その授業を聞いてみることによって、基礎的な知識が定着するのではないかと、というふうに期待感を持っているんです。

流石にパソコンを開いて授業を聞くところまで許してしまうと、もうそちらの方に集中してしまうと思いますので、そこまでは許可していないのですけれども、未来には、そういう形式の授業も出てくるのではないかと考えています。

つまり、いま大学教育を取り巻く色々な状況というものは、「新書」本の話だけではなくて、ウィキペディアをどう評価し、その使用を「認めるか・認めないか」とか、「信用すべきか・すべきでないか」というような問題も切実な課題になっていると思うのです。

つまり、知識に対する真贋や信頼度を見極めながら、どういうふうに現代の情報源を上手く利用していくかというような課題がたくさん出てきていて、そういう時代には、他大学の状況なども色々収集してみると良いのかなと思っています。たしかに、鳴門教育大学はこれだけFDも繰り返しているし、他の大学よりも非常に進んでいるという自負があるわけですが。

例えば、評価に関しては結構プレゼンの能力で評価をするような大学も出ていると思うんですね。その点について言えば、パワーポイントで発表させようという課題を出すと、慣れていないという学生が、三年、四年でもいたりする。

それから、逆に、旧態依然のように見えながら、やはり未だにレポートを相当の枚数、課題として課している大学も多いんですね。レポートで鍛えるというのも1つ正攻法として見直すべきかもしれません。鳴門教育大学の場合には、しっかりした知識の定着度を見るということで、試験で評価すべきだという傾向がたぶん強いと思うのですが、しっかりとしたレポートを書かせて、そこで評価をするという大学も未だに多いことを忘れてはならないでしょう。

美術のディスカッションの中では、あまりに即戦力の育成に傾きすぎる教員養成系大学一般の問題等も出たのですが、私はそのプラスの側面も感じたんですね。本学の学生たちは、瞬発的な発表能力が高い。他大学の嘱託講師の経験を申し上げますが、「どなたか意見を言ってくれませんか」と言った

時に、受講生たちは、みんなモジモジしてしまって何も言えないんです。学部3年あたりで比較してみると鳴門教育大学の学生はそういう時には、積極的で発表力を身につけている。自分の意見をまとめて、即座に言う力があるなと思います。こういう意味での発表力は確かに鍛えられてきているのではないかと思うんです。

ただし、授業中に聞いた小さな芽のようなものをピックアップして自分で調べてみようとか、もう少し深い探究力を身につけようというような、そういう方向性が薄いと感じています。

例えばこんな例がありました。池田満寿夫という作家が子どもたちに鑑賞教育をしているビデオを見せて、池田満寿夫について私が色々話をしたんですね。彼の版画の変遷も、評論家の久保貞治郎との関係も。その翌週に、受講生に対して、池田満寿夫について自発的に調べたかどうか抜き打ちでチェックをしたんです。授業中に示唆していた画集での作品チェックについては、全員が調べていました。ところが、脱線して話した「エロティックな小説で芥川賞を獲ったんだよ」という部分については私大から来た人はたくさん調べてきていたのですが、うちの学部から上がってきた学生は、脱線部分については無関心でした。出題したことに関しては全部やるんだけれども、そういう風にちょっと脱線したこととか、ちょっと引っかかったことについては調べてこないんですね。正直に言えば、そういう受け身型の学生には、あまり将来性を感じません。池田満寿夫の小説『エーゲ海に捧ぐ』も読みましたという反応のほうが望ましい。

この辺りをどうしたらいいのかな、というのは非常に大きい問題です。悩んでもいます。

もう一度申し上げますが、他大学の状況なども、もう少し我々情報収集をして、良い授業改善につなげていきたいというのが私の今の考えです。

(司会) はい。具体的な提案等、ありがとうございました。では、もう時間なので最後にお1人ということですいません、お願いします。

(成川) 時間がないので、最後に一言だけ言わせてください。今まで先生方から色んな課題を出されて、またそれに対してのご意見を色々伺いました。今の学生というのは、たぶん興味の対象とか関心が我々とまた異なっているのではないかと思うんですね。それを聞きながら、学生側からの意見を非常に聞きたかったかなという風に私は思いました。

かつて、うちの大学はFDで学生も参加型のFDを行っておりました。それで外部から来た講師の方にも、それを非常に評価されたという風なこともあります。なぜそれがなくなったのかは私知りませんが、可能であれば学生自身がどういう風な考えを持っていて、我々とどういう食い違いがあって、議論をしながら良い方向に進めていけるような場があればいいなという風なことで、最後に言わせていただきました。

(司会) 学生参加型のFDという具体的な提案をいただきまして、またチャンスがありましたら次年度以降につなげていきたいという風に思います。それでは、本当に大急ぎですみません。最後に、まとめと閉会の挨拶を西園理事にお願いいたします。

(西園) それでは時間もありませんので急いで、本日議論いただいた内容について、私がどういう風にこ

れを受け止めたかということについて、3つに分けて報告したいと思います。

まず1つ感じたことは、FDのこの特別公開授業に係る全体会、本学のFDにとって今までにない熱心な討議もあり、中身のある充実したものではなかったかというように思います。私たちFDの学部・大学院の推進委員会として感謝申し上げます。それで、本学だけではなくて、現在日本の学士課程全体について言われていることが、「学生が学ぶ意欲がない」、あるいは「本を読まない」というようなことが指摘されている訳です。

例えば、米国の大学生と比較した時に、「自主的学修時間（1週間あたり）」のデータは、次のようになっています。100%で見た時に、1時間から5時間の間が日本ではだいたい6割程度、米国の場合には11時間が6割程度、こういう比較があります。日本の学生は「自主的学修時間」が少ないということが、指摘されているのです。

本学においても、「モチベーション・意欲」という問題が指摘されているのです。梶井先生のレポートにもありましたように、授業評価の中で「授業に出席して積極的に取り組んだか」とか、あるいは「授業内容をよく理解するために予習・復習をしたか」とか、このところが全体的に低いということは、ずっと言われているのです。

例えば、学生の“学びの姿”が変わってきているということも言えるのではないかな、と思います。図書館長の会議等でも、図書館にラーニング・コモンズというものを作ることが提案されています。つまり、今の学生は、図書館で静かに勉強をするのではなくて、お喋りしながら、お茶を飲みながら勉強をするというようなスタイルになってきているということです。例えば徳島大学でもそのようなラーニング・コモンズを作ったことによって図書館の利用率が非常に増えたとのことで、これは色々な大学で、そのような改善を行っています。

2週間前ですけれども、本学当番の図書館長会議がありました。そこで兵庫教育大学も図書館でラーニング・コモンズを作ったと報告がありました。その1階全てがお喋りしながら勉強できる環境を作って、2階以上に本を置く、こういうようなものです。

それともう1つ、読書について、学生の図書の利用率が低い。それを改善するために、先生方の推薦図書というものを設け、「人生においてこの本は役立つよ」と、「僕はある本のここに興味を持って読んだ」というものを推薦してもらいます。やがて先生方のところにも依頼が行くと思います。

このようなことで、学生の読書離れについて、本学でも少しずつ改善しようと思っています。しかしその意欲ということ、モチベーションということについては、やはり全体的に低いということが言われています。中教審が8月末に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」という答申を出しました。ここでは「学士課程教育において学生が主体的に問題を発見し、解を見出していく能動的学修、アクティブ・ラーニングや双方向の講義・演習・実験等を授業の中心として、教育の質的転換が求められる」と、提言しています。この提言にありますように、アクティブ・ラーニングということや実験・実習というような、要するに身体全体を使って授業に取り組むようなことや双方向の授業を講義の中で進めることが今求められています。

本日は、2つ目のテーマに、モチベーションということの問題にし、それぞれの部から提案をいただきました。その中でコア授業について授業評価を見ますと、全コース、17とか19のコースで、いずれにおいても5段階評価で4以上なのです。

これが、コアカリを導入して以来ずっと続いているということは、社会科の町田先生の授業や美術

の内藤先生の授業にありましたように、専門の先生、教科教育と現場の先生とが連携して授業をつくり、それが実習につながる。あるいは授業構成が現場の実践につながるという形であり、ある意味ではアクティブ・ラーニングというような方法が組み込まれているのではないかなというように思います。そういうことが結果的に、この授業評価の4以上につながっているということが言えるのではないかなと思います。

それからもう1つ、教科専門と教科教育、あるいは教育実践との関連ということについて、これについても今日、町田先生などから発表をいただいたのですけれども、その中で専門の先生と教科教育の先生が連携して相談しながら授業を作っていくということがなされています。そこでは専門と教科教育、教育実践との架橋がなされています。コア授業は、教員の関係でも、あるいは内容的にも、あるいは学生から見た時にも、そういう専門と教科教育の架橋がなされているというようなことが言えるのではないかなと思います。

文部科学省の中教審教員養成専門部会の答申の中に、新たな授業科目として「教科内容構成」とか、あるいは「教科内容学」という新しい専門領域を設けるべきだ、という提言がなされているのです。そのことは、本学ではコアの授業Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの中で、すでに実現していると言えます。専門と教科教育・教育実践との架橋ということは、教員養成大学全体に求められていることですが、その専門と教育実践をつなげるということが、学生に任せていたのではなかなかできない。

したがって、専門領域としてそれを作るべきだという提案がなされている訳です。こういうことから、専門と教科教育・実践をつなげるということは、ある意味ではカリキュラム上、カリキュラム編成としてそれを具体化しないと、なかなか学生レベルでは難しいんだろうというように思います。

それから3点目に、学問をやるべきだと、形而上学的な内容ということを大学でやるべきだという提案がありました。これは、当然だろうというように思います。先ほど述べました、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、そこで提案されているアクティブ・ラーニングだとか、双方向の授業だとか実験実習をやるべきだという、こういうものに対して1人の教育哲学者がこれを批判的に言っているものがあります。

その中で、大学教育では、やはり学問をやる、芸術をやる、技術をやる、そういう真理を追求する中で学ぶ喜び、こういうものをやはり育てることが必要だと、言っている訳です。大学の授業改善を「方法」のところで問題を解決するのではなくて、本来のところで「学問」あるいは大学という本来の目的のところで、解決していくべきだろうということが言われています。（「教育学術新聞」〈平成24年8月22日〉）

今日、まさに私たちが話題にした3番目のことだろうと思います。翻ってみますと、教員になる学生は、生涯学び続け学び直していく教師でなければいけない。そういうような能力を身につけるには、今言いました「学問の面白さ、学ぶ面白さ、新しい成果を知ること」というような学びがつながっていくのではないかなというように思います。

そこで今後、どういうことを改善していけば良いのか、思いつくままに言います。1点目はカリキュラムについて、現在「モデルコア・カリキュラム」を作っています。梅津先生を中心にいま整理してもらっていますが、授業科目を精選するという観点から見ていく必要があるのだろうと思います。

それから、2点目はTAということの提案もありました。米国の大学において、なぜ学生たちがたく

さん学ぶのか、自主的に勉強するのか。米国の大学では、課題も多い、本もたくさん読まなければいけないのですけれども、そこでTAが非常に活躍しているということがあります。成るかならないか分かりませんが、こういった点からも検討していく必要があるだろうと思います。

それから、本学の学生の良いところ、非常に発表能力があるということがありましたけれども、そういった点についても評価し、そのことを共有していく必要があるだろうなというように思いました。それと、成川先生から提案ありましたが、こういうFD改善の討議中に学生の立場からの発表、意見というようなものも今後FDの中で考えていく必要があるなと思いました。

以上、私がFDの推進委員長として、今後このようなことをどう受け止めるかということで整理いたしました。どうもありがとうございました。

(司会) 西園理事、ありがとうございました。それでは、全て終了しました。本日はご多用の中、たくさんの先生方にご出席いただき誠にありがとうございました。発表者の先生方には貴重な発表をいただき、ありがとうございました。最後に発表者の先生に拍手をもってこの会を終わりたいと思います。
(拍手)お疲れ様でした。

IV 公開授業週間

平成 24 年度公開授業週間実施要項

- 1 目的 教員相互の授業参観を通して授業改善に取り組む意識を高めるとともに、具体的な授業事例をもとにして、各教員の授業改善を図ることを目的とする。

- 2 期間 平成 24 年 10 月 17 日(水)～平成 24 年 10 月 23 日(火)
参観申込期日：平成 24 年 10 月 12 日(金)

- 3 事項
 - ① 公開授業は、原則として公開授業週間中に開講されている全授業科目とする。ただし、嘱託講師担当の授業科目は除く。
 - ② 公開されている授業科目は、すべての教員が参観できる。
 - ③ 参観者は、参観日時、科目名を記入した参観申込を、指定の期日までにメールにより教務課教育支援チームへ送信する。教務課は、授業担当教員にメールを転送する。
 - ④ 参観者は、教室への授業途中の入退室はできない。参観者は、参観中は静観する。
 - ⑤ 参観授業に対する授業研究会は行わない。授業に関する意見交換は、参観者と授業担当教員とで協議の上、直接行うこととする。
 - ⑥ 特別公開授業を含む公開授業すべての中から、原則として 1 授業科目以上を参観し、所定の「授業観察記録」に記入し教務課教育支援チームまで提出する。
(ただし、特別公開授業については、参加申込及び「授業観察記録」の提出は要さない。)
 - ⑦ 提出された「授業観察記録」は教務課において取りまとめ、授業担当教員に送付する。
 - ⑧ 授業担当教員は、「授業観察記録」に基づき、授業改善を行う。

V 平成24年度 F D 推進事業の成果と課題

平成 24 年度 F D 推進事業の成果と課題

平成 24 年度に実施した F D 推進事業を振り返り、本学における今後の F D 推進事業をより充実したものとしていくために、本事業の実務を担当した学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会から、その成果と課題について述べる。

本年度の F D 推進事業は、①公開授業週間、②特別公開授業、③特別公開授業に係る授業研究会・F D ワークショップ、④全体会の 4 つを実施した。

まず、公開授業週間は、教員相互の授業参観を通して授業改善に取り組む意識を高めるとともに、具体的な授業事例をもとにして各教員の授業改善を図ることを目的として、10 月 17 日(水)から 10 月 23 日(火)までの 1 週間実施された。その結果、教員同士の情報交換や交流を通して授業改善に向けた動機づけが高まった。

次に、特別公開授業は、他教員の優れた授業実践を参観し、教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を共有することを目的として、10 月 17 日(水)から 10 月 30 日(火)までの 2 週間に実施された。多くの教員が参加しやすいように、16 のコース等から各 1 つの特別公開授業が設定された。各コース等を単位に実施されたことによって、教員の専門性や関心が共有しやすいという利点があって、多くの教員が参加することができた。

そして、特別公開授業に係る授業研究会・F D ワークショップは、特別公開授業を素材として教育実践力を培うためのよりよい授業のあり方を検討することを目的として、各コース等ごとに実施された。今年度は、その後に開催される全体会のテーマ（①学生の授業に対するモチベーション、②教科教育と教科専門との関係、あるいは授業実践力と専門的知識との連関性）も含めて議論してもらった。各コース等ごとに特別公開授業、授業研究会、F D ワークショップを一連の流れの中で実施することによって、教員が主体的に参加することができた点は効果的だった。

最後に、全体会は、4 つの教育部からの代表者に各 10 分間発表してもらい、その後全体討議を行った。特に焦点を当てたテーマは、前年度の「ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書」で今後の課題として指摘されていた点、①学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、②教科教育と教科専門との関係、あるいは授業実践力と専門的知識との連関性について、であった。全体会には、比較的多くの教員が参加し、分かりやすい興味深い発表が行われ、活発な議論が展開され、このように全体会は大変充実したものとなった。

以上 4 つのタイプの事業が実施されるプロセスにおいて、コース等内部の教員同士が交流することで、またコース等を越えた教員同士が交流することで、個々の授業改善のみならず大学全体の改善につながる F D 推進事業が実施されたといえよう。

今後の課題について 3 点を提言する。第 1 に、公開授業の実施時期についてである。特別公開授業及び公開授業週間が毎年後期に実施されるため対象科目が限られてきている。そこで前期に実施するには本委員会の開始を早める必要がある。第 2 に、F D 推進事業の内容に関して様々な可能性を検討することである。今年の全体会の議論の中では、たとえば学生参加型の F D 事業など様々なユニークな提案があった。さらなる展開のために、またマンネリ化を防ぐために新たな試みに挑戦していくことが必要である。第 3 に、F D 推進事業への教員の動機づけについてである。今年の全体会では活発に意見が出されたが、このように教員同士の交流や議論を活性化して F D 推進事業への動機づけを高めていくことが必要である。

お わ り に

理事・副学長（教育・研究担当） 西 園 芳 信

本学は、平成21年度からは、全学的組織としての「FD・SD」委員会を設置し、FD事業をより一層推進することに努めてきたが、平成24年度からは委員会を見直し、FD専門部会をFD委員会に格上げすることにより、より効果的にFD推進事業を実施することにした。

本事業は、本学教員の授業実践力の向上と授業に対する学生の認識の深化を図ることを目指すものであり、平成24年度の事業内容は、①公開授業週間、②特別公開授業、③授業研究会・FDワークショップ、④特別公開授業に係る全体会からなり、具体的には平成23年度と同様、次の3点を目的にして実施された。

- ① 教員養成大学である本学における、教育実践力を培うためのよりよい授業の在り方を共有する。
- ② 教員養成大学である本学における、FDの在り方を構築する。
- ③ 本学の学生の現状を踏まえた、授業改善の課題を明確にする。

そして、④特別公開授業に係る全体会においては、平成23年度のFD推進事業において専攻・コースを越えた次のような課題が出されていた。

(ア) 学生の授業に対する意欲・モチベーションについて、例えば、コア領域の実践的な授業には積極的であるのに対し、教科専門科目等への意識が低い傾向が指摘されていることである。

(イ) 教科教育と教科専門との関係、あるいは、授業実践力と専門的知識との関連性についてである。

このようなFD事業の目的に関わる論点でコースを越えた共通の課題については、これを持ち寄って全体で討議することは重要であると判断し、全学の教員で取り組むこととした。その取り組みの方法は、上記の課題を各専攻・コースの授業研究会・FDワークショップにおいて議論し、その内容を各教育部の代表に発表していただくこととした。

各教育部の代表の発表やそれを踏まえた議論において指摘された主なことを挙げると、次のような点である。

○参加型・対話型等による授業方法の問題。○授業のレベルを易しくすればよいのかという授業の質の問題。○教科専門と教科教育を関連付ける授業の工夫の問題。○コア授業は、教科専門と教科教育の教員とで授業内容の設定を巡って対話が生まれ、これが授業の質を作り学生に還元されるという授業の準備の問題。○学問に取り組む以前の学生の体験不足・知識不足の問題。○学生の意識として教員採用対策に重点が置かれ専門に取り組む姿勢に欠けるといふ、大学本来の学問への取り組みの問題、等々。

このような各専攻・コースを越えた課題についての全学教員による議論の内容が、本FD事業の主なねらいである各教員の授業改善に少しでも繋がることを期待したい。

最後になったが、本報告書の作成に当たっては、学部・大学院FD委員会委員、教務委員会委員、ならびに授業担当教員、学生諸君、関係の事務職員の方々にご尽力、ご協力を頂いたことを記すとともに、あらためてこの場を借りて関係各位に厚くお礼申し上げます。

学部・大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会委員（平成24年度）

理事	西園芳信	委員長
教授	木下光二	基礎・臨床系教育部
准教授	町田哲	人文・社会系教育部
教授	宮下晃一	自然・生活系教育部
准教授	内藤隆	芸術・健康系教育部
教授	吉井健治	基礎・臨床系教育部
准教授	永田良太	人文・社会系教育部
准教授	武田清	自然・生活系教育部
准教授	松井敦典	芸術・健康系教育部

平成 24 年度
ファカルティ・ディベロップメント推進事業実施報告書

平成 25 年 3 月発行

編 集 鳴門教育大学FD推進事業委員会

発 行 国立大学法人鳴門教育大学

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地

TEL 088-687-6093

FAX 088-687-6107

印 刷 協業組合 徳島印刷センター